12
881
24

玉鬘

巻の名の事　此巻ハ哥をもつて名とせると見えたり
恋わたる身ハそれなれと玉かつらいかなるすちを尋ねきつらん
此巻ハ乙女巻に次年をのせてハ六条院卅五歳の三月
より同十二月まての事をしるせるなり此はしめに夕顔上ハ又条上
にてうせ給ひし源氏の君ハわかりおひ給ひて方ふかう此後あく
物かなしくおほしまてむなしく成給ひしその時ハ女君十
八歳源氏ハ十七の時の事なりやそれまてより先此段位のお
とくのまゝ中将といひし時なり従ひ給く玉鬘ハ其名を
そもむすめを得り此姫君の母のひとり西京にやとり給し
かめのをとの男大宰少弐になりくたりしにくたりしを待て
肥前国に下りし女廿年まてありしと待りしか肥後国の
大夫監といふ者おもひかけて此姫君をいひきてのぼるべき

桐壺にありし人職よめれとみちるとさとうらしひくまへ示
きのかりし時御縁ありてうちとの宮に行あひたまへるよ
なりして六条院へとものへら迄行ひしよし玉鬘是
其後廿二の年に成るへし夕顔上まさに成給へる
廿七になり給へき紫上八廿七八と此巻にみえたれ
とさまとも廿八なるへし夕霧是其としの十五
歳なるへし

年月をへたてぬれとあかさりし夕顔を露忘れ給はぬ
玉鬘 夕顔の子を源氏露のゆかりと思し給ふと也
なり 玉鬘の其三条此時夕顔上八たうれくなりぬへ
りされよりことしまて廿年たちけるを見給也と源
氏の其の時はさるものなりとも思ぬ給のるをとはりなし
細 此やうに玉鬘是給ふよりまうされなんとあしうてはりなん

しきことも有也此発端(ホツタン)末摘花に給の迄ともとも也
各別なりさん末摘巻此心常陸宮のひめを聞てまし
夕顔上よりかくのひさうらんともとおもて尋ねるとあらんあり
此先の心は今六条院を去畢(ザウヒツ)なりく思くとも此院内よ夕
顔上の在世なりしへりとよまてさもと思へきを歌とそ思給へるよ
りとあはましかはとあはれく思出給ふやうやうに見給ふ事也
発端耕つきうるれやうあとも只文の後のやうなりはす
請(シラ)説(セツ)形也今なり段えとあるも
らくなりんのありき筋ともとも見給ひさまあるにつきてあと
玉鬘 六条院なり給ひ給ふてらくをとは給はいけてと夕顔の
わりしまのさたをも思出給と也
あしまうしらぬるはなきにくちわびくのあなしいつ
捨きと為れ
世中にあしまうしらぬるへき也ふくもぬりありそれ

河
此等為郡芸式ア大臣同時の人也難為證歟中古日一
儀とく紀氏而今かちん先達也作者結業平朝臣
まこ日記の君は女のもとり良きの子乱遠しきかとまつしまみ
せおもひあり河原左大臣のみちのくに思ひそもちすりまとら雖
ゆへ乱遠そめにし我ならなくにとよめるにやしるし
業平ハ元慶元年五月廿八日以卒五十六時左大臣
同十四寛平七年八月廿五日薨七十三是等同時先達為證
例也とく

右とハ何の人か侍らぬとなけそのやうなんとこそ申ことにあら
うちかれ物かりおほししられたる 河原夕顔のあはれなる也夕顔葬
送の時も東山まて行さらん也 源氏の左遷の時も世上
なりおこま給ふ人也 細 夕顔上の娘も人によりて給也
かくさ人のはしは休てまつりきこえなり 某 世わたりて人にたへ

題しらす 人なくはなにとかさりなんひの時もあるまし世上に侍るまゝ
まつりなれ也
源氏の御うらみひの後とにきこえ人の後なとにもれ人ノく也
えほうし給し侍とまるころあかりなをかくぬんとく
細 ひたるも業上りかくし給也
ゐ記そめてある物かり女君ともおほしくれと 久ひとさめ
れ 思ひやたりん也女君あまた上の後りかも又さし出てある
はかくとこいひそめたるやそいふる也
人のうちあまた被居物し給へまうく侍りてれはさくたるをれお
源氏あさん物とも給ハ侍しましきしとも申てれはうたるさし
あかりもあろ紙さに 夕顔乃世にましまさへとのたまとりん也
やうしあさいはとゆうまえてかめ給はんあつきなりられたやまと
あるへくしはとくてはしあ 河原たちまちこゝをはとのん也又あ

姫君となりて後ともありて又たつね給ふもなかりけり
源氏大将にて会給ひしとのゝ也 末摘花とあり
なひ給ひて見たまふ也
この時夜ふかく月をのかれたまふてみちあはてましき給ふ也と
かのもの給ひけんふかく思ふ所 又六条院へ参られ給ひしも
夕顔ましく海さとそのかたみまゝしとや九の女の悲しみ給
よ夜ふかりあり
かの西の京にとまりきしかの君はたゆくゑなともたしくして
又夕顔のめのとに玉鬘をあつまりてはしめし也 花見まうち八玉
かく此君の国の中しはくし下向て廿年ちかくして
頭への乗りしますをあらく書なりしあの也とと
わか君 玉鬘の事也
ひとへ行物をほくして又ほくしたちひちなれとこそそのかたちにて

少弐の夕顔はらく筑紫へ下りしとも源氏乃ゆくゑしらず玉鬘
はるゝをなくしてたるをもくあるへ西の京より玉鬘
のめのとしかるも夕顔の女房しのとや
わかれむすめもとしかるあなたしととかくてさそそ
ふるさともとゝのふれしたゆりし給ひ
細 大弐乃家に上のかみなるもやいさきをさて我をもとに
肥前国の上八のめしてむかしく奴給ひてさとへ
のちに入きをはくを給へきとて大ををあり給ひてさとふ
してまさ給ふるや給てあとにこの高京は古里へ八給
をせむしあるあま給り玉鬘は給ゆきてゆるも
それ給ふのとの給ひとお我りありていさきられえてあり
あかりかれわか君のみちおゐるとそはゝしへのさいさとさ
夕顔のめのとやその男大宰府のお我り奴く筑紫人

下しとや同大弐をもかねて織部令にくらし
舟兄の法ゆくゑをたつねんとようろうの神仏にいのりて所望ある
ちすれはひとくさるへきあらくをまうつ見ゆるしられと法なり
えにきいのりほさしきんかくはせんかせう兄をうるとにてそ八流なる
よにかんをましめ　祝宗　久世のあれとり帰されともこえる為出さ
てさしそくうらんにとて武勢をつれて下しとや
あやしき道のまでへあまりてたるゝかれる程なりおとなきん事の
うるしきるすあるをたちて兄ある御のめくさんとさひくかれた
宗　筑紫肥前国への屋をとうしをかゝり　文兄なり
宗　隆中納ハ今内大臣これや
はるへきさまるをもるすれうちふかくて兄のおりしくんつくと
さてもとさてひうひ行てかくゆのまん　祝　式内と云字ある絵の
さし任命をうひあるるさあって文兄る武勢のこときこ

らをやしきんそのうちにゆしゆ久兵乃ことを隣話に
ゆくゑもさしねんかくのえんそれめのとろん奴へし
まさよくも見んまれ行つゝありおきたるすれんへをとゝめちなる話
きんもうしろあさうるへし　宗　武勢と文兄ん見るまし話
きねとや
さうあるそうさこみてくさるとてこやゆるし話するへきとあるも
あらはるを　祝　隆中納への人ノ我法をとさりあるくつ
くしゆくて法をてくるさとくへとハゆるし行ましきこともや
とのうさてかさしひあれをてハとうしくうこくハ海うう
きさうくきうしたる法を海をと　とのうしし　祝　とのさ
ともしやさんや
ことあるさうしひるかれ舟のきてさかれうる御といふと
いまさるかん御とさある思さるかれいちにかくて兄をとは違い

いかくれ母の侍らへりてうとうとしき紛よりつきて涙もおち給
なく　ことなる事してひかる君　抄　それそうあるうちなきなり
むかしの事も物かはひとつかなを　抄　夕顔のめのとの子の右近なり　花　かの武の女婦(アネ)抄
つまとしなくなりぬれば也を用る也
と云事を君おもひさしてあはてゝいと也
あれはちゆかしきさまよさめ給ひけるをきかれてこそ見
つ　抄　涙ぐむもさすがにいとあはれ(ケウクン)也
くらうおそましきものゝさわがしとかくもの申し給ふまじきを
ともかれ　抄　夕顔のこととひてかく風流(フウリウ)とも也　細同
ほそともはかなくて入てあはれにしのびて京の事を云
中にも又　抄　むかしのことがら心ぐるしとも也　花　此(夕顔の)事を云る
あはれとの詞也　細　此詞并あはれの事ハ河花也抄云
流布同也河流可然也又殺ハおほえかすまじきとのたまふる

夕顔上の事をまだよくも知(シラ)ず、妻(ツマ)ハ夫(ヲット)なりきとてかくれ給ひぬる
くるゝに此おもひ入るまじきや、紀伊守とむかしの詞此人
おはしますれば物ゆゑ思ふ事なきに何とて後捲(あとまき)
親の物ゆゑならずして、とかく思ひよせて流れけり
人のむかしのえかやりなる
神無月はつるにもなくて月も見え給はぬとあはれなるに
くるゝ(涙)もなく、ひとり雨をながめつゝ、なさけなき物のはかなくし
まさて心もなく
(打ながめ)いとしくも何かの事につけて山にもなくなる波を
うしろの山に[illegible]けしきにあるかれとも、ものとほくなりにて
花　舟(フナコ)のあるふたりの家ありし事ある(イタヅラニイヅクニ)漂(スヽミ)見ん出(イヅ)後捨(ステ)(ユウ)恩
漁(キヤウ)の浦漁師も見えなく此のきを
浅(アサチ)芽(ハラ)見るまて萬里の風のよもすがら吹きる林をさまたけり

細 判者有て人々こそ

かゝる時は此ひめあるなり 於 めのとの心もとなき事也

花 お武史姫と二人さしむかひてなく〳〵とかたりにお武女二人

とゝせきまゆひといふ縁りの哥ハ男ハいつくし時てき

とそおさなきはのかのや哥をよまんとおもひけり

ある時おもひやまうく我ハ下ちしまへと乳母の局

しきの子ひ兄とうちむかひてハいつに男ハ人てらるとも下

えまうしき心にかゝるや 細 前より志るしてきと

舟人の三つえとある大鳴門のしられきに郡の中大ゆ紙

於 宋 大婦女の哥也大鳴門ハ播磨国也我らかれしきまて有

舟人も三つえと思ふくらふ了見も又とえにけるや

河 大鳴門の涼をはや讀はあらせ也 細 我身々そハ三ひ見

あるかと舟人ハ何処の事のあるかな也

ちゝの心ゆゑともに此神に添てや哀にてゆくなん

宋 姉女の哥也沖に出て八舟の人々あはれにもこそ夕紀を

こふらんとや此哥に角をもとも乳母ハ志くなハむまて

めとも哀にてあらぬとはあらぬ姫への花すいて此哥のとお武

史姫か哥とてむかもとめん哥ありと讀消との齢にあり

もとより経へり 河 此哥二首お武女二人 婦は許 讀也先 乳母の哥

の羽りむかしとめとしのひあるいをとま哉云又坂もとまし

うて我しらハちてかはしもそ云う奉れもしらとめたつ

ゐるや三と 昇 此哥そお武女二人の哥也 河 花続お武史姫

哥也女子(ニョシ)いまた十家さるとも讀つきぬ不審そ

海(カンニャノ)云不同此哥意の人をおさなくよりとあつら

哥此前の羽とともめて思へしもむかしとのわの羽に刀の

乃云おもそせまうしへはよれいへきとひくしまし

花 お歎はさることなれど妻ハさらしとや[illegible]此詞もさもあり
ハ契をなさるゝ事なれば 細 実とハ夕[illegible]にも
ひとつの[illegible]ならぬそのうきことを歎りてのひあるる
はなれ近きや南海に一のまるあり 離れとそそく[illegible]長の時
真へ付まそ行てそ事にや後ハ事になくなとをしくまそ
これとひとつの別まても見えて
古とも思ふとやさるの別りならぬとゝかりけれハてうせんもん
河 漢朝古事に孔子在衛国聞桓山之鳥生四子羽翼既成
将分離悲鳴以相送といへり是を四鳥の別と号せし詩り
と別離を悲しむとはまれ
そのおそれをとるとく我をおもひとることそのことくさに
あらそ
打出 ちりや鏡に見えし御影とも見れとも我とも見えし
とてはやうの形見の鏡にて

打出 鏡の宮の御影そ行はそ人のつらさこそおもひやるれ
花 それの御影ハ鏡にも我とも見えしハ家のうちにおもひや
ねとや 細 同之弁 ことに神とを皇神とあり
ひとつに見るとつきてハまつてきたれるはとをとひやりてこ
ひとときてとの見えとうつる鏡にてあらしくてはなかとくに
さらに見えし鏡とれなとも見あり うとにつつさ
肥前国に付る也 細 鏡の宮也
打立しき後なる女ましそひ鏡もてうへそ本読へる
しくちやとるとしくれハ 松浦 名鳥の名をり見え鏡に文の
の女のそひしゆる此ハ松浦鬼領の霊のなちそひくる
名の事へし 花 なにうき鏡もてゝ夕影のうを鏡へる時の女の
あるこれて真にさまるうしなにまに見えするとそまる
松浦めのとれ思ひとも見えてしまふ事へしりかぬとこにち

しうやらかやられ言をも見んとて姥まてもゆちよろ
ねとせこく　細　叢分とくハ夕顔のよやんちあるくとは叢
の花故をうるくはるやましき猪ならん無気ゐるとり
きこえしもとゐる人とおほしきや
猪世にあるくあり行よある所あるとも杉ひあるとゆるゝく
のとなん　某　夕顔のちられく奴給とらしくとや
お武ふんとくのわりなんともろにろけさ給り
九　悲別四十年をほく五十年めに上洛とや左室お武
あて下向も生路ゆかしきん人を威勢をみて上洛乃
時も在ことしきとや又ゆしくもある人のそゐるて八
真国の人もあるゐろそてもある人にさるれた任
ちそくも走友ハらそて去りし国り宿くそくふと
や猿西任の有しめ彼る河よ奥給え紀略く

こともあるいきほひある人をも　細　たのほともよろしけり　故妙
宮あるたひつくもろくしくともやそて奴ほとり
たゆさひ　細　猶豫(ユウヨ)しけるや
ねまきさゆまひくゐ志なんともろゆちあるも　猶　お武ヶ病(ヤミ)て
ゐるへし
此見るとそろゐも有り行つるさ夜のゆかしきまてねかし
きゐるもと見ゐまちてまれさへうちまきそてまいりているる
名ささ夜り在る東給りんとまえん　花　武蔵野のよし筑紫へ
くろると　お武の任(ミ)ハ五ケ年をかれたし此見十ゐろの時
や昇同之　細　お武ハ任のうきるを五ケ年ゐられたし九つ十
さらりとあるへし
あやしさかりよたひゆそ給ゆも思しけるすくこひ出の内をとゝ
いりしりと京りゐそとまりてちる人くきくあるも志らてもなきらん

みな郷ハひろきあれいとかゝもうるへしぞ聞すひつそ
きらうを　私　西国のうれしきを云う
さる人きさんかも云うをなきらて　私　ひりゝ京よのかりて
路中わ度りえうとをなきらんとや
ちくなりし命云へはありぬるこしうしうかあさうか
私　一家ハ玉鬘を京へと云ひつきし甲斐もなく西去
あくらもむるしく時とのんや
とのこ子三人ありけるこれ将監京ゟりかてなきうへきこと
を思へ　私案　おやの孝ともなわすひそかにひ我とや上
代乃人の為を云ひ神仏や識の住家れん如是し
細　少弐の子ともや一人ハ豊後介それ外ハ二郎三郎や
わかれきうとハなおすひそとうまんかひとさける
花　親の孝養と云んや　細　住ありゝあのつんさしさまへし

それへわ此みとをさきちれひとめもあつきはたくむさこれ
うしはくへきゆへあると云ひるしうれハ入りしうきをてうるを
あすくうしつき思ゆうかとた　私　少弐か鎮なるへし玉鬘とう
くりとや　細　玉鬘の実父と我鎮のうちあてもあしへ
さるや
みえうたうをぬきハ佐もまたん得さくあさく京の心てたち
をとられと　少弐他界とや
此少弐の中あしらけるくふ乃人わ佳くあきしてやさ深
りうちまのたにわちらてるくこれあもあしてうをとく
すたこの気将ひとくのひ路ふますにちて見えよるもまさ
つまてきよしにちくおとくのもちさんくちとれハいや去る
さとくう別しせちりんてをおはうたにあしまかしう
もの十路　私　更緑なるとあて下へとハ必中れよきさもありし文

わかきも有なれハ人々くちに源の大臣の御さまをやんなき
とくさかりの御かたち左右(サイコツ)とも
さくつハうくもそいる御めすり人々ともれきを　口伝(ツタヘ)ニあり
をいつる御中人好色(カウショク)のさんや　細同
せうそこうるいとた御うら　ゆくしまめさましくお御ゆき
ハ誰とくこさいまたはうちるを　いたくと有ぬ人々れと
花 縁(エン)みといふかくおほさきとや　文(フミヤリ)やきたるとや
いしきかるとのあはれなく人みと見きほあさましうして我よ
のかきるをハもらんとおひちしそれハ古は武のむさうえ
かるとちすんわするかる抱きとつ　花 色見をむ鸞よ一向(カウ)
あるれかをとひ出て人をもゆうとつゝるしれ御や
きくをゆくしをいさ御めして部よみてなりて又勿とく
うきとるをなけんし　宗ハ人むをう思ふに御かうくのうひあはれ

久しくかきくらしさとのみや
いとこきおもほとといとゝらうあはしやおまもひゆるし給つりしに
さるをとをおもふうゆはえひとそて世のを給りしると心ひおけ
く仏神よ祈をさそてちすん祈んしある　宗 頭中将ぞ鸞をと
愛子(アイシ)なりや　細 幕末まにあすてこの旁妃るるや
もたてめうさとのことを深りつきたるよ頭うちとも色にて
まことはさたなり　花 宿縁(エン)有深くとや　お武の子男女とも色に
其所につきくゆるときにとをもにありつきたるると云や
ところ　細 宿よみするのて有付るるや
おのうちみそいうおさへと京れ事ハいやと候ひるやう
すみくゝりとゆく
宗 お武の書(カク)尼君の心やかくきつきぬれハとのびやう
部への(かく)ろのきを何程しあうちるとゆるや

物おぼしきるまゝに紫をいとゞ紀のよわけしかり

細　むつかしき也

祐さうなど志給ふるさまに有りけまゝにおいさくの

おり無いとあはれしくめて有し

於宋　正文九月九六斎（サイ）日ちやうさいといへることをするもと

の世すも時といへる也年三也　補　後撰（ゴセン）集（シウ）貫之

祐さうわくこちゐとて女禮越（エツ）れもとまるともぐさとりて

結んれどくらへくはかりしある

百（モヽ）とをに八十（ヤソトヽセイ）勢ときへくいのりく所（タイ）むれ志るしと荒

仙（セン）祇（セイ）法師

見んぶしめや　私　祐さうといひく年に三度有る

ともお事と云也又云毎年星をまつることとせいふと

云いり　細　年（ネン）星（サウ）也又年三正文九月此義可然也

後世れはとめたると志給ふ也

このよむ所人ひせんの玉と申しひあらそれかるをと無し

いさくうよしあるへハまゐこの少弐のむまこれありけるを

こさくはるへあるを本とこれをとられてもいとゞいふう

みてうし向しきますてあん　弄　少弐任（ニン）をそく肥前に

係（ミカ）也一勅同く　細　任（ニン）果（ハテ）く後（チ）肥（ヒ）前（ゼン）に行するり

大まのかんとてさぶれ国ありしぞうひろく無うしこいつけ

てきぬかはけ人ありいさるひかりめし此はそ物あるまゝあり

於　一期子孫ひろまく人也太（ダ）宰（サイ）監（ゲン）などいふひとあり五

位乃大まうち成るる也

河　太（タ）宰（サイ）府（フ）一（イン）員（ヰ）帥（ソツ）権（ゴン）大弐（ニ）少弐（ニ）大監（ケン）二人少監二人等（トウ）あり

大典（テン）少典（テン）大小令（レイ）史（シ）少弐叙（ジヨ）爵（シヤク）之時少弐（ケイ）とい乎件（クダン）監叙爵

之附大まうち監と号すて大監ハ正六位下少監ハ従（ジユ）六位上相（サウ）

当（タウ）也有二軍（グン）監（ケン）一軍者有二本一監者有二兩二武官也

花 大史監ハ正六位下相当(サウタウ)乃官なれと従五位下に叙し給ふを
さ大史監と称(セウ)するや　新 大宰(タヘイフ)監たるものゝ叙したる
あり監のみなるもの読(ヨム)こと　細 監ハ大宰乃大監やね当六位
やらかうひの中監あて叙爵したる叙爵してあるを
大史監とハ云也
むくつけたところのあるに似さうきもこれある也まつきさくら
うちある女をありめて見んとおもひあるこれもめ見んとさそ
けていさしきさくるとあらうこと我ハ見んかくしてもさらんとふと
祢んころりのひろるを　栄 打そろうしきんあらし好きと乃ふり
又まうしるやうや
いともむくつきくるて　栄 尼君法とのおそろしくぞや
ゆてくるしとさうて尼りあらちらんともさひとももとなり
久れ也　花 玉鬘の尼り奴給りんといひきをさるや

いよくおゆかりまてまてこのくめくちゃしきぬ
花 監肥後よりも肥前へ来れるや
このところをもよひとりてうらし給ことハ云ふさ給よありける
も　花 大史監をもたいゆる我云ふまうに同心(ドウシン)しゆきく
兄弟(キヤウタイ)三人とありとひとしきを奴もそへしやうえを取らしこ
人を同心するや兄一人を同心せぬや
打るのしんまつさちかひをとらひ給へきことあるを打らし給ふり
細 何るのとかひ会て同心合力(カウリヨク)もへしとや
常ろりとハ郡の郡にあり　細 二郎三郎や
花 お武ちとのこ子三人ありて二郎三郎ハ大夫監よかうう
りまてかるや　太郎豊後介(ブンゴノスケ)ハ同心せすけるや
志りしてそれをそれくあそれとおひ中のくなれ　花 栄 父乃遺(ユイ)言
言(ケン)とおひさしてもむかうしれ汝とともおもひられ

と我身のうへうちあけて監八可然人とこそひとく二人を同
ひまいらせ監りあいくゐくれて其隣国かたへおもむける
きとのいなうへし
とのく我身ゆうかう人とそ其のまんまいとゐのもしきく人るう
こまにあへくせしまへて八こ乃ちうれせうめ八めくらひあん
や　細　此二人う紀也
よれ人の法もとちと云ふとも如やまうほまへしまはしすよ
みたしまて八なみのうひうたあしん　於　いうふ可然狩猟ゐて
ましめまてことも親りさ人ましまゐりうた甲斐た
あし〳〵と二人の子ゐや
此人のうく狩んころよとゆき終へるそとハ法さんちうひあまを
たう人さあてさそハう今世男女あもわうしまし〳〵きあ
監うめ此とそてやとも殺生世のことあてさそおしあ又うく　於

岡りおさ〳〵ゆうこともまくせうとや
みきとうくれ終とも花みのうらけきことうハあしんまきしむ
志井まいうかなえせぬことくさくしいそんや　於　監をさきらひ
終とも法して別り可然ゐのともあるまし〳〵なと二人の子
たうゐや
いひおとせた　於　尼君皆ておとゆや
いとぶいうしやと中男て　於　尼君ちもと本寺然るうに中やさや
中のゐゐうこなるかこ乃もときをたうん於　於　中将兄といへた二番
めうるゐりいうされともさあそおしまて兄の其後の中ます
うことおさくいの中将兄といふむなるへし　細　兄弟あう
ちあて身一乃兄とや
いとゐゐひくしくおるしくさるのあうた於武のう終ひし
事をあう　於　たゐしくしいきや何うまうしきこととくいうあんある

あし　細　是ハ物しらせたなうるとや　退乃字也
やうくまのへく京にあをなまうてんとのふむをとめてまくな
きまうひく　拾宗　京への心せ来らせんとや　細　上海を云り
きく其のいふうひろくてさ後へ行て行来とをとにしぬ
かくまにんなうくあてかまへんやてそこ云り
宗　夕顔乃ことを云り
さる物の中にまし可能ひなんるまやもひなけくさとも左ら
て　盗人も武蔵のましらひ行りんとをいへり
我をいとなほしきも犯ちとさくあこちをうきて出にて
るとこさるめをおうくきてうくの表さしうたし花う
りい道しめつておりしくうさきうやそうる　拾　大夫盗人ん
をいへり　細同
あとえそいともきさやとあり　拾　たらこめる也ハ詞のあまり

たることをいへり　経文云ハちものを使しさうめゆる其文
云あるも可能をもすれとも云ものをあるんハたこゑる
と同前ぬへしとや　細　孝経序ニ吾嫌ニ其説迷経ヲ云
雑きく経ハ大なるよろしきことともあるくくとも
あすれや志てよくこそ物をいふあれと　拾同
こうしもこの家乃注言をとくらしひとうてうちつまりて
こころのと　宗　大夫盗人の文章也
三十なりあるとのこれをきくまめしくふなう
てこころちのきれとふひなりうくまゝしくあらてかる
あるまゝのひさるとこるもゆくしるお付あさおひんちよ
きに赦めてうきてさへつわなると　宗　盗人也
あちうへをよふくれふるとそて　拾　盗て取るとこそ
ふる物なれとや懸想人　貞観政要ニ　同　気装人ト云人

同前

よるひと言ふひさされ　宗　夜遊人

さ後うへさる素乃夕暮なり秋ならぬともあやしう

おもひとるゝも

古引歌
いなくても生かゝれハおもしねなも秋の夕ハあやしき引

引歌ハやしきんたうと見や此ハ素此夕なれハ

秋ならぬとも思ひなる如へし　細　三月なれとも

引歌のあやしう思ふとなるをとまり

ぬとやうしおもてとも思しいそあそ　祇　塩ハあしく

しくおそろしきんなれハまぬを徳かしとや社

母おとく世話をむさこゝとなのくをたるにてうてう

ふとハさらぬ如へし故お武の妻乃ことなるへし　細国と

故お武のいとあさまをひとさうくしく細し詠へしと此て

かあひうさひやさんとさ詠へしうとも恨らんさしゝとも

こもやうしハ待しほとにいとゆくきてそれ詠めと

宗
塩か祠や

そのうちもにいうかはうまつるへくちきん如さしとかとく

まほしめ　祇　尼とありお武のうちもにつうきつうんと塩

うさや蔵るんや

夕かもいとさつうにたあそてたかつひつる　祇　斟酌なれや

とも思いふかや

此おそらしまひらん女房もちてとにうきを詠られていさとう

うしきるゝたてほうしうさうくの其ことさひやていい

うくきりちんさうもとなるへき　宗　子細あるひとくさく

思いふかや　細　おそれおとくや

おとくこと

たふくに折しもあるのハつらぬ女ともあまく候ひ出
まてゆるをさうめしうらむなりと　細　女房ともいれ
ほきうしきうめしてやうやおほくめもうらや
けうらともやつきうをひしうちにハ志けりちん
於宋　そのをにさうつきうせ人をこゝろて云詞や　ひとしる
ミやハくく人なとまてや　花もやつきうハ田舎(イナカ)の詞や
まハ志納めてともるれいやとも世俗よう依數(タヒ)の詞
あるとやんへしなとハたくく人なるや志ハ助(タスケ)詞や
細　志やつきうや云詞や
人しなと　細　同筆(ヒツ)めともまふしきや
やりそをとた后乃位よおとしなましくぬをやるといと
よきとにゆひはく　后の位より　於　本意よむうつゝむ
からや　細同

おとしむまし物をやると　宋　おとゝまうこれとあるや
ゆくゆくの給ふをいふとさんかひ有とハさとひ給ふることまく
せつらるこれ人のやぬくんさひもちゆるは住りてやうてう人々
法住せしまゝんとんあきひ内けさ給めれさくんゝきるゝ九
給へまつひぬるといふ　宋　尼君の詞や　細同
ゆくにあおほしもうゆるさ　宋　かうなとなる世のめとも
盗乃詞
天下よあつうれあし　打き給つらとも　於　又ちとつしくしく
おもへし盗ことよあれるや　細　天下(テンカ)主に読(ヨム)やおくに
以和者アといふ田舎人の詞はうひとそくしきぬへし
あたうハほうまつうやめそん　宋　盗(ヌスビト)初のそこともなと
しやきんとや
あのうらは神仏をとのまに志すんなひさ給つうちと後へきさ

かゝり　孟　監あまた神仏をかけてちかひの詞をいひつゞけたり
おかしきほども所なくもてなしやせんとなり
又此日なる事といそぐ　孟　此日をさしていへる也
この月は季のはてなりとは　中にさる事といひのかるゝ
孟　三月は春の季のはてなれは婚(シワナン)にも月をいむ事あり
おとゞのいひのかるゝ詞也　細　三月は季(キ)のはて　その月なり
本説(ホンセツ)あるにや　それはみな田舎(タウナ)といひのかれし也
おほそういくさきたにとよまむ事は聞しかされはやくひとしく
おめく〳〵しあり　孟　大夫監か退出のさま也　細同
君にもし心たかはゝまつらなる鏡の神をかけてちかはん
孟　大夫監か歌也　誓労を監かわくへいひよせて世に拙しとなん
のかうんとよめる歌を鏡の神(カミ)をかけてちかはんとよめる心
るまうてさし也　松浦の御神をと判　鏡の神とは御嫌へし

河　浅しほなのめなる男の心ならぬを肥後(ヒコ)国よりまうてきて給ひし
るかたよりまうてきてかくとりてつけける也けり
紫式ア　あひかんとおもふ人は松浦なる神やまことにちかふらん
花　肥前国松浦郡(コホリ)鏡(ノ)神ハ大宰(タサイノ)少弐藤原(ノ)広(ヒロ)継(ツキ)が霊(リヤウ)也
又鏡山をも神功(シンクワウクワウ)皇后の御鏡化(ケ)して石(イシ)となりたるを鏡
山といふ也　毛とも鏡の神といふへきにや　下の宮は松浦(マツラ)
筥崎同社(ニヤ)なりといへるにつきては石清(イハシ)水(ミツ)八幡と同躰(ヨウタイ)の
よし也ときゝ侍りたるしも鏡の神は二代君あるへきこと
えいこと　細　鏡の御神両座あり　両所ありかんしたる広継ハ
御霊八両氏一座也　奥にある神功(ジングワウクワウ)皇后也
この和歌ハ仕うまつりたりとなん思ひ給ふるといへるを
みつからもよくしたりとおもへるにや　孟　監の隆全と自讃(サン)せる也　細同
あまりふるしいぬハあらしもゝへくもをかしと　孟　尼君はさまかと

さしもなそて我身をもおしからぬ身なれとも何かならぬとも
細 されはこそおもひしにや何とされけるさ候や
むかしのことにて候ほとにまことにまして物をもしらぬと
てあられハ 尼 むかしのことにて尼君の御ゆくへとも知
らぬともおもひもて監かわたりそてあるらむや
いとおしくさふらひしかとも 果 遠国(トヲクワウ)ゆくも尼君の御返事
うちふかくひあるほとに 細 人なともなくかゝる御有様にそなり
年をへていつるふかくひあらた鏡の神をはらひとやうら
祖母(ヨハ)御(オトヽ)の事や 細 年月のすきてあるへきと事を祈るへき
あらはれ又監りとしまれて神をはらしとなへきと
や監かおもむくとてもはゝまてうちあるまつり
よあるかくまつり 果同く
かくまてうしろ紙にてやらせ候へくに物のさるゝをもゆくて
たゝよるとささら御なるひとおもひて物くるしともなくなう
ぬ 尼 監か事とさらめて行とてさゆうあし物けもそこと
ぞおもひにようさへされしてまたにおもひて 尼君の
ことなしと如くし
むかしめたちハさそへひとしはくらまうらく 尼 是ハ新に
ある監はおもられ文書ハとそうあらしひくちうに候
かとハいへとも尼君のさつまにて正直(ニヤウジキ)なる事をそうとりあしら給
あるを監にうちめしてこそとうちひ行をも見て候やしめ
まうまうし給とのみ如くし 細 新にまうしてものとも
なきともやそもひつれともむ事のかくとのゐまうらあう
かてさしまうてとしうまうも
これへさへ候にかやしられと 果 正直(ニヤウジキ)にとまうらしと存るなり
おもはひへまいらせまうさんと 尼 尼君の事うと監かとうむ

又はさありてハおしきをやむごとなき方におもひをかけしり
たてまつるをもきこえハいのちをもすてるやうなる人によ
りて事をしるさんため神代のしるしをもなんとも申さく
しかもハ尼天の年月て伊勢物語をもあらハし給
ところをしらするやうにや此一首を人にもしらさへ思ふ
係なく
業平日記へいふハなにやさきて業平の妻ともなりて我もこのこと
古今集あまた業平の卿の歌やあまたあると伊勢物語をなさる
文字をもつまし歌をとひろく其の事なとある故へ
又古今にもちのし此集をもちもちて誹ゆへにこそはれそ
あまし我かたりにつゝ比の気たる融公のやんことなき
つきつきにはれしてゆへなくしそこはれてかきとしかとも給はれ
をむかしありてハなきしともある事をしるさると伊勢物語の業平日

歌のやうな意の事を義の家のうちにはれかくるよしをさしてたの
女ふる歌りかの古今此集のうちにもしらへ給ふもまかへからず
このみにハえされゆへなりとられ給ひし我ゆへありてハおしきとも
いかならくきよあるなしされハ一その此集をとらぬと申らくて古今とさ
しとのまゝ給ひりめ此あるかた物やの細此人のかくる事とある
をともみへのこ給ひの仮契なとこなしつく給へるもの此はんのなるひか
も神をともほくしてもとこなへきものやうちんとおもしぬなかくあり
もへてなるの伊勢物語業平日記の名あるも此給や
あるとは思ひさくしきさん人のかのかきそて此ひとめ給かのやくしきて
きこえは花物をもてあそび此非天のほかしこと此給かんてとなみし
さられハ花ちらてあるの事にしなくもあると女とそもそくて
ありて作しなるもをもこそをもとこえきをなハ中ひて母のつく
それ理をひとりそにしのなしなしをはのにし人のあるなる女の盗

りおちてかやう母そちんして云母や　宗　尼一元の年號
て諸道行てやおゆまり給ふと云ふはくるゝ也
おいさゆくとうあつきて　孫　清てある也と云ふ也　盛也
花　むかしそちや也　經納(リヤウナウ)志てる也　宗花梅(アイクワ)給りおへくはかり
あらくや云詞あり同こしと　細　經状をつる也とつらくを
さあてある也と云也
むかしき清くちつきられ　孫　盛なんとひろ也とあるさとは
めてかる也
あふしの中ひさらとともなそ伊達ロむしき民めは行う
もとこゆとの人をてともちとちきらあるんこれにのそ給うな
とあおはしあまつそとて又ようまんとお考へ給ふとかたへ
まやあまんいねめり　くもむしき民母そ徐しる
宗　盛ハ玉(ト)民(ミ)めてハある紀との詞也

二郎かめさくひとくまくあるをいてと打そろへんつくてい女
これを々を紙でむ道て　孫　貴二人のことをかへる盛りそくへハ
まてるやうに尼元ちるとんゆるさぬとの人也ことまて兄(アニ)あ(ゴ)
後(ゴソ)めよ也警察への打つ行うんこと信(サイ)侶てる也也
めくハ清かまつる人かんくるひはちくはへきん也るし
宗　其後めの詞也
ひれくのそらうハ此久んよむかしんあくもとてあつたひ
みてるを　智くとなれ兄せをも清へ盛り我同んやあと
て中をとこうひあむや也　細　今海さうの兄せをなかめひあ
ともある也
三 此盛り行くまれてかさくの見てろきせんとくうちさる
世にあるへき　孫　ちとともあのてくくうさ道めとく也
あらくあるめをやかんとこひるつくひるうれてむめ兄ぬ人

ためにはあひくして海のほとりにありて　宗　業平蔵人也
いまさらかく思ふ事をかたるとはおなしきみにて
宗　此業平少将監のまゝにつかはれて識所に住しける所
をとをつくにあさんとの心也へし
かくきりとをとふらひまゐりしてさり　称　業平のやうなるものの
せなるむと一たるものを思ひ出てあるとの心也
いまうむたちもとおしうちへあるかふるへしときりてあひなるとも
まめやかに　称　業平のはしに蔵人兵衛也と既に男とりて
あそはすへきれのかるあるへし
あてさやかしはら中将を業平此兄とかたそらひとよ兼ぬると
かてく舟りのつきある　業平此兄　細　末のはしか也
たまのかんをうれしきとつきて四月廿日の頃より日ごろ
てあんとなるかとにかくて云ふるなりあるを
細　この行ありかるとし
あしなきとかるんひろくありてえつてたりきそうにえなりれ
まいらしうてはひらんしとあらてさ秋すかのかり
宗　すとしもわまうさなまえのかくぬとも
年頃つるけさとてことにまてくうれしとともあるし
称　十七八年在国也業平か兄なりんし也
あく松浦の宮乃前此法とうのあき中をもとれはみるとをあんかく
まるりんせしまてて行くかりある　称　一説両白なまれはあ此業平
都あてを業平へさともなくうさわのいの木幡乃人ある
都の徒とれつきとかんまししと此業平乃ん也
うきぬるさ渡る所まてもゆくさやつくゝあまゆととまてくはをとて
称　宗　業平兄乃る也うさ鳴尾よりめにしもこうきいそとそ也
ことをうれとてうれしさくまれてもえ文行きはてても帰へりまま

又ハちかきほとも塩竈の浦よりはなほ浮橋のうきて云
のあるをかしきことはあるまじきにや如へし　細　其かみ
云もうき橋ハ思ひもさまよひ行ハ思ひありかしきをたつう
きたるをかしきにや

ゆくさきもしらぬなみちに舟出して風にまかする身こそうきて
抄　此勢の云也身のうへ入りよそへいはゝある云也浮雲流水の
ことくなるとさへかりいやしき哀なる云也といふをあはれなる歟
なし　細　前ニ同し行先もしらすとて風波にまかする
身とや

いとおそろしきにうちなからかくゆくこゝろつかひてまつ
なるよしをのつからひとつていへはまたしもかなしくおもひ
なりとさへこゝろをまかせてもや舟にのりてゆくとほ
なりたるへくなりなれは　小舟に乗りてあまたこそ漕舟

やしとの世あるところ舟あるよしいふ
こよろの風ふくへしてあやしきまてかりぬる
抄　旋風の吹来とも此勢はせゝに出路かん随所に出き壊みう
其のふちを結び納史かとや
見てきれるをもあるへしにるあやしくいかにも舟やわかんちに
さこゆのまたかへりそてくるをもつゆとありとあり
江戸　延喜式　四十七
延喜式　あかれ時にまいらせて舟私はせしく伊佐奈とも比知きしかへの
忠見集　さなき舟のきにちるおもて船の波風にする浪にもありける
年をとそへてひとつきにかへは船に淡路国は舟をそへの
此まへ祠あまて年比播磨に以前をとゝめうる
不老神中挿影昭云々　うきのゝさしは播磨にあり倍程よ
ハひとさへかへとものとの李記云天徳四年十二月
十日老日備前備中淡路木蔵辞至備前史申云賊二艘

陸奥 縦（ヨリ）雲（キノ）棄（ナ）多（タ）捨（ステ）舟（ツ）贍遊戯（ノ）ハ公案に見えて　花 ひろきのうき
のうちくれ舟李（リ）鳳（ホウ）王（ワウ）紀の西都あり河海にかんしより
ゐひろくのひさしかるかんよりもうれおもろしきくへのをひく
郭西やとミうするせんかるし　花 ひさしかるは一向（カウ）やかハそ
くろかうあらしも一向にかるもさえんなくて大丈篇のをひ
ならしハいかくきせんとも
うれしくにもちのこさりくひろきかれ色てまれあくしもあのこ始かり
花宋 弘贄芳氏字也 我うれしものひろきかれいろくかまてえそれあらされ
ひろきかん較あしもあらぬとのんをまあるし落着（ラクチャク）かれき
かも　細 弘贄芳氏字也　又號笠翁號花田久
川原とうしかれちくきぬといへるそもへいさかるこうちうを
る　川原　宋 淡のうれしや
まれのうちことしくとまるありかうてをも経いとくてふ

ゐるのあきけるうれしも義ありゆるも　宋 傳承也 河原うらきん
ミ日路頭とも　花 良惟か意見（イケン）のもあるむとあらしそ唐（カウ）
泊（ヒラ）まるも河原へハ三日ありうるも此故に川原と云ふあちら
きてかめ子ハかくとまるとようとまて祝りとうさひあるも
唐泊ハ綱引あまにあり狭衣（サコロモ）亭かくうかしらひそれ
速かく泊りつくあうまつく人の中くミも
前後のをもきを義ありあつらしらくひきあへてりとりまつし
きめてをもも見ぬとて　花 見ぬといひく思そ打合へきをみる
かし
打合へとをいて皆うちまそくあるいひくあらぬらん
花宋 菊乃絹あんらくひろくさりて妻子（サイシ）のことも見るや
うちれと能く思案（シアン）されハさてゝも妻子をを捨つるよ
と聊（イサヽカ）後悔（コウクワイ）乃心出来あるや

ちかくしくものこゝろはまとわかからうとやうとハみなかれて
こゝにあり　注　ある後ハ分人の夷とたる内の心へハこれへすまゝくの
かゝるとやうも達とかへてこゝにふけるとといへり
我をとありとこひくくをもまとりていかくさあ后もんやこよ
注案　大史監ハ昔後の事とゆくこて妻子をといゆをにかりをい
ゆるとそもちもんやや　昔後ハんや
んめさちるくをくらうさそていそにありられともとしんのこゝ流
つもてそあさましきこゝろのくとさひ情くゝろにうてかようをくう
ちなう道ぬ　注　はまるとに我祷一念ゝりいさうのあぶとな
くゆるさとを思ひゆるのよとあさましきことやし　昔後ハ
んや
このちはせいしとへむちかしくもそくはとなゝるもと思ふ所えき
さてもとにあやしのうちさや

案　涼源郷井不得見胡地妻児虚弃捐　白氏文集
没漢攻胡之時従人止胡国不得帰従軍敗之故也後又
従漢攻胡之時止胡之人欲帰従也此時弃胡妻子而没
不入彼人剿圍之号敵西佳人仍西虜便之意叶為猶喩
云々　細　昔後ハのありさまを文集縛戎人詩の心よくおもひ
たり全篇をとりくるへし　花　昔後ハ我女をと誘ふしる
をとりてゆるを痛したるやうに
年比さこそひさうるへの心すをもみえうにならひくみをさ出すし
をかくふうかんとさ夜くとひはくまくなく　案　思ふ気も男
ありそかれてみけるを我ハくに男をと思ふかんとや
かゝるかさとそてことも事あやとひさるくへきあるるさとをもるし志達
なる人をひとふくへきそのましきんへとお何としもて
注　海宗ぬてハ河達とをもいふる人をと立ちかしんてゝそもちすれとの

なほ高き京なりとも人すまれぬ路ありけんや
たゞ一ところ此ほとりをめぐるなり　宗　武蔵野はたゞあら野なりとも
むさしのゝ年月経ぬれつるせなうをとゞめて　うき人情陂風ぞふく
よひよひに人めしのひてれし　祇　あまりに年経ぬる肥前の
我をたのまれのかる恋に名乃ん也
このんとものがたりありけんともろこしにあきされてお経ゆまと
めぐる堂せんとて　このん　細　武蔵野や
いとゝしれつゝあらぬ　細　京へいるや花同
九條のむかし志まゐる人の跡つけるはしをひとつくる
やどりとさめをこゝて都れうちをいへともたゞくしこさん乃
まことにあるわかるゝもおもへと　志まへに来る人
細　めのとれまる人
何中しきいちあき人のあつまりていたるくよのあつきをとぶらひ

宗　市女商人（イチメアキヒト）
杖やとあるまゝにさしてさゆくさきなれしまゝとおはしけむ
これまでもなにゆゑのまゝ人をも　三月もすゑのなるみ
とにかくして物わりあるや
よくわかるゝかにまとへるみちしあつまくりあるもあり
さ海のさつさまれるとみるに　宗　無使ほとんとなり
河ニ魚鼈（ヘツ）竜居ス陸（クガ）ニ鳥雀之栖（スミカ）ヲ古契文　本文作可勤く
細　古人さ海く花鳥別勤あるおりを絶はまよけ候開く雛（ヒナ）　名旨
鳩（キウ）有リ河洲（カシウ）ニとひる毛沼ときゝけるれま唯とよめる人をも
あまれもとくるをとうにまどへる也八三るなり
名もしん女もさしあちく　祇　蒐葉（ガウ）へとるゝしんもと成る女
いとやよの老後うん也
んめさるうくはそたもちりあるくとむ人に　宗　無思案なる老後也

後悔すや
去さうひ来りしものゝやさしく哀いりつきてあけ行つともとの
去りつへうちうぬまとてく尼となりうちもまさを
右 妻子のあはれいりつきてまれく筑紫へ母をくるゝなり
世を後の家人とする也
うく思ひくあきられぬけさいひとわしうれぬ　宋　世を後の世夕
旦の母わとものわる似べし
あふうこれ为急いとやさく結ひ人ひとるまれ法多よそ
いうちとくまうらうをあんまとうあつまりしまれく思ひしき
いさわひ入りあうてとも　宋　世を後の緒也
わうみをとかる物の中にゐうかりしなりてあまにゐちらのやまり
とうるしひあくさあて神仏こそハ法るへさうらあもとうちを
こき去りをまり結ちあ　右　盗るとた縁りつきてたきくらち

わしうしんとのんや
ちうれ猶りやうさの宮とやへ　宋　松浦神功皇后あてまし
ますや筥崎ハ八幡也京のとも一神なるへし　筥崎筑前也
や　河　松浦宮ハあまさ乃由緒河る也　風土記神功皇后
河鏡石よ姫く鏡山なまいし由もとりんくらるる一神
と云也　細　神功皇后鏡を埋給へし　るへし
右 松浦筥崎同社也
うこあてともうひるも祈ゃ給ひしまうしくさこさ此わ旬し尾
しうあうりろのくろみもとされ見給とてもかはくの我たしや
行き　右　斎串の河時も来り給又上海乃刻も多く我きを
て行とも
いまの宮こた海り給てかくるんは去うりしと給てまつりきものかう
さうやさやくや給へとてやうてこりまうてさきなかるそ処

さり志まほ人よりひきてみあ　抄　少将すでに上洛し給ひて八
幡の法師ゐるしろをまいりて法しあれども
ちしとてさやくたやみやうしひし大とくれ申まうさとうひと
ましてまいりて法を申す　抄　五師也ちやくハ嫡也
お武乃ゆるしひし大徳なるべし　細同之
河　貞観八年別当安宗云時以是如法師一始補五師一安和
二年別当貞芳時以文師貞喜法師一始補大五師一云々
村上御記云康保二年八月廿八日薬師寺三綱文師等
相率参陣外云々　拝　八幡宮五師文人あるなるべし
一勤五師八幡宮法師のはうさあり又人のすべて不従八幡宮
のかさしろを法寺に文師ハあるなるやらん
うちつきてハ　抄　八幡にまいり給ての後のかわりと云へる也
細　それまでにつきて

仰乃法中あまた祝激ちらん目乃やもとのうちあまたおしくきまする
たるしおもしろし給ともろこしあまたに出まてあんや
抄　唐の僖宗皇帝此后に馬嵬史人といひしありそ乃あ
能ある の坂乃ごとくありしめ武以入りし法の蓋ありしまたるを
ハまくて秋ことにもそり給へハ其形をとたり給ふ法之千
人の后乃中に出し一の法粧兎也まうる后たちれを法そて
ある時に法つに参し給やう所詮　才人一の后あまた之子人
の中に我乃うんしんを出し一と定めしるへきれし参し
給ふしむとてこころすに彼史人我形のおしきを残し給
て日本あり祝激歓喜としてあしたるする給ありしぬをハ
我形のよきやうにと祈申けるに次官彼史人誠に拙二お
とろして見る給へにこころをも給へとも彼史人にはまさ
るあきれハ又才人乃后に立給とさるまありまた後給てし室

物と術に始終ハ建立とくらへ行と見んとしたり河内え
縁起とおほくとも皆さくら在所ありても見えしたり縫を
可穿也　河　縁起云長谷神ハ河浦山よりみ山に涌通上
人建立十一面観世音并に利生を揚也　文武天皇と浮の名や幽名仙人十一面二
天六神亀元年正家被建立堂宇同四年三月廿日供
養海沙弥行基　僖宗皇帝后馬頭夫人　文宗次宮孫太子后　形の見よ
くさるゝと致行者ら仙人のをしゑにまかせて東より西
て日本の長谷寺観音に祈請し給あるに夢中に
一人の老僧紫雲に乗して東方より来てかたのへ観
水を面にそゝくと見んとて忽ち容貌ハ端正なりぬよくり
因茲乾符三年丙申七月十八日に侍女を引率して明州の津より
出帆して十種の宝物を本朝へ送る又吉備大臣入唐時長谷寺
観音を住吉明神に祈請して野馬臺を読ませるも霊瑞あ

るよし河漢り見えたりとぞ　花　長谷寺ハ観音也仏とハ予
ハ神に対して神仏とひとつにはあらずとハ并なれども
仏とかくるゝや又観音を刹仏とうたへ無量寿仏涅槃しも給
て後一切衆生功徳山王仏となつけまゐらせん仏となさん事と
名をひろめまします也　細　并を仏とかくるゝのみならず云
菩薩とも仏菩薩ハ同じ事なれどもやまへしまゝ縁起より
見えたるを
まして此長谷のうちめぐりてもときくふかきひとへにもとりし
色行つれも　細　長谷とひひなくしく我長谷の人ならねどいかにて鳥羽
ほりんとや又乃縁ハ法名上人の聖朝安穏万民豊昌と祈
行人も慈悲ハ万民の人なれどもや西説たすや
我見をハましてめぐりし給てんとてくらしもとてまいる
花宗　慈悲ハ頭中将乃息女あて万民の棟梁也又物ごとハ

申さく此の大臣の建立有れも藤氏の行末を別而志まし
あらんとのみ事ましてとかや
花 神亀元年二月廿三日勅使藤房前朝臣奏状に不載
下綸言子来為長谷寺造御料物とこと業を勢気
をも藤原の為にとて藤氏繁昌を祈請せられし
長谷寺の縁起にのせられまして也云詞をあらはし
給ひ一儀云あらはし此人をも祈請渇仰をされはその志し
をはしもし給ひまして我君は弓日の本にも速行て
志かも初瀬へまいりて給へハ利生にあつかり給ひぬるさ
かひあるそとりのみんやさき
あとはしかうちなるもと見たりあらそひちりかと見ひ
しつくるしたれとも入給ひまつたに物も相撲とつゞきあまた給
花 立願の時め云やさるくあや 細 一段の意志あらはれてや

け さらは此大臣あつて家を思ひけてその行すへを初瀬にまいり
つるともちのもやむかえとてしりくを
かれるはとゝかうひれ方あつてた往世すみかたけるおやせ
まるくあらり行つるも我を哀とおほしめしておはしくにける
宗 むかうしのんや
さらひ給へはみるほとにきこえければ御力のかたちを給へと仏を祈れし
て 能 むかし勢此給ようきかまへに母の面世にするも好きたるさま
不へむかへ給へとの給や
宥しんさあまりたるほしき様も新あまるをましくかとこなう
のうらしかとあけさつてあまり給ゆゑかくかへしあまるなとて方
のうまたまるたまりに 細 三条あつてあるれ給ゆく母との床かる
ちをとへおほしき給まるや 宗 同く
とやと申すへしくおほしたりつゝて 宗 あのうれしまるた

女ハ一人まだしきとや

つちやとハ所ハ四日といふ事この所をかきたるにつきてこゝちも替

ていときこえたり　抄　昔ハ福徳の里坊と見えたりとハ二里

ちかき所をさしていへり京よりハ一日に半時ばかり行所なれど

も四日めにゆくといへる猿ハ女の陸路ならで面白し

細　長谷寺のあたりなる里と見え当時悟りすまんも市といふ所

此所也

旅ゆくむすめなくとも人にくろひさるれどあゝれはことらぬまで

まひしかれどもやんかごまでまくて中将の給ふ　抄宗　日や中にある

むすめみともありやまことくあれども兄とふさ給との

うつろなり

この女を姉もし人あるかきを　宗　其後女のことゝや　細同

ゆきやまちかある人女るをまて八方ともあるおりくはてあると言

人女のあるをいへるに三人　ゆきやまちかたる　細　めしたるを

女房あるかへるに三人　抄　お武の後家主勢也

是此三人也　細　おもひやりて八兄弟也

渡りにやうそくして　抄　猿楽のてたちれさ寂やいちあらきり

あらゆひなる物といへり

云かまゝしめく物あるかをかけ女なきにこれを中をそあるいと

なかなか思ひをるに　抄　事しきさま物をとりあるかた下女を

とかく二人とやされハ女房なれハ三人めや　細　みやしさ女也

始めてはふれむとそのとにかへりてまゐりをくべきとゆかりとに日

昔ぬ　抄　つちやとくえうるす旅をかるへし　細　清えいち

あてはせしや　花　李部王記延長八年八月作ニ願文一

逢テ行ニ長谷寺ニ灯ヲ十万灯右記云正暦二年三月参ニ

長谷寺ニ献ニ御明十万灯ヲ一云々

家あるじ此法師をそへやらしまさんともてる所に何人の物
しらずそはやしきぬともしまうきそとむつかるをとめきほ
くさくばとり　ひ　それ坊主をそてすゐ人を座とさんとす
るにけしぬもちす此人のやとまうるとて腹立とのゝるを
むつかるを此うち無碍ちるとかめさしまうの人をいへ
なり　細　おのゝ人とやとさんとやし物をもてくしたち
さるや
きたへくさぬ　宗　坊主此さのまに人ゑのごとく旅人の付る
やたちは京より初瀬へ参るに宿り付や
これもうちよりはなちよろしき女房ちらしも人ともう
男女数多ある馬よりて取りきてやさしく思ひあへし
されとさうきたる折ことも女にるを宿
宗　大きは鷲のるを取る申へり窮忘也

法師はせめてちかくにやとさまほしくしあつしらうに紀あらく
いとわしきれと又やとらまほしき心もさ侍ほしくはらしかし
それは　旅宗　せめてとは坊主の折角たのむ故やとしまいらせてし
らかくと更に後悔あるとかへすかへすいわしくおもへともやされとさらに
よそにゆかむもいかにとて奥の方にうつりてけるとや又
法まきうる人あるとをそてよその坊へもうくし座ぬるをきく
あるや　花　うしろとうく我からん地あしくやまんも
へく八奥ありつらほりにくしるとして外より人さのうりかくれ
ちるらぬ　花　飛驒人をとは家の奥の方より人つき内にて宿を
とらせ女見ゐるとをとうくへかきてもとのまくらにもとくや
せちやうるも思ひ居てをかりしまてはこゑくへきちかし
常としつらうるは見そめてかよへれは思ひしよう
丹　一趣衣轉障と衣幕のやうなる物をもてえらふ松ちると絵り

さて壁よりくさかしきをとさてくたちとう玉鬘に
ゆひやりもし侍るとや　細　几障や幕なとはへりち障
子の結ひたる物也
院もそれなれくまたこひあくれとおもひさし　花　来る人を
えるへのこともさるやうに玉鬘此ひとを常陸こひくれ
をいはるゝ也
年月にそへて　細　後奈落を引釈せらるゝ也　常子地也
もしさはれさましらひの　孟　おもとうの思ふにありあることとをいふ
清連ちく如何身をもひきやうとてみえてしにちんをとひく
ましてあり　孟　おもとは玉鬘にいそうひくあくんをとや
思ふありひけんれは中もくるまへきこと思へれとうちつゝありとおもひ
ところへつくゝあまるをうつるにこれ中宮のせとをとありれ
せんしのまとにようきてきまうり給たるへし

花　なにくも来侍りあいひくに咲くとしまへてうとや
細　思ふよう侍あるきもそれくしさましらひん中もそれ
いさ連て玉かつらのはゝきあかりへき所念はせて来侍
てしや
わしきまつくしうらきとあこれをおきへりし来りもを給へ
花　いるとうち何そていとうくらすしやとのうをも少り
玉鬘へも来りもをよるとや　孟　おもとうからよ侍て乞堪の家との
人あてはなしむり加へし侍甚あとうちありそて也をも
お恋せとも聊余あるとの心あるへし
わかなとの人あても何しも也そく　細　同案なるをあくとも
あつて主意あるやわけしき也
ものと侍さなる中のこゝをたこの物とこれうかりてんちもとされ
ゆくえ所得しをいつとわくるまし侍とを見うしまふ中とうまにろ

まてやつまつれハおほけなのさしへてそてたゝかみをうとしきを見
まぬあり五月も三条とくにめをやよひよひる女をこれを
又見し人あり　栄　右ときのことくや
故御方の心も人あれとさしく後うまつりあれハ
水　夕暮乃めし後うひし三条と云人也
うれしくれ路へりし涙もくこうまて宵し物あまり五月をと見ゆ
してやうしく夜のやうあまり声も御ほしさく人を見ゆ
されとさゆへくもうまへをて云ひよりく二条女りこそん
涙もとう　栄　夕負の宿乃るや
其とうたとひひくへもうれみてそあくめ姫君の御ひかり
やと云ひよ侍ていとふもとあくてこの中へさそてたまうに三条を
よそもこれとくひ物りんいまそてさこゑもこぬつとみくし
也御ゆうも打つきをあまりや　水　若狭殿方おさとち女時のれ

あり乃これと見えてそ侍らうん三条りたとうこそん
とりんたまへ
元　寛平法皇云后宮御有ニ若狭太夫と云（上云）と条若狭の三位太夫
ハ昭宣公（セウセンコウ）のめし使いしなる人の名也此物語乃若狭太夫
若狭殿うるのや太夫とうなり時も此人若狭太夫とひしと
云出しるなるを　細　若狭殿のもとの名也此名ハ縁あり
条の父の若狭国守也とありまある時太夫になるに
つけて此をとりて若狭太夫といふなるを
からしてさて見えしにそ侍るなり　水　三条かありくていふ
詞也　細　かく勇を此三条不審有りと云なる也
はくしめうてさるをそうるもみにあるをひのかたをと志
らせ給へき京人のよく人云らんへみや侍らんとてようきなる
栄　廿年ようるをと也

みやひたるかの終りにきぬあをとさていとつらぬとりにたに
有り 案 うちきぬあをき緞(キヌ)の給ひたるを云也小袿なり
きぬとハうちきぬ也 花 搔練(カイネリ)ハうすき紅のきぬ也給ひ
たりたるをといふ御中にあるは小袿をと云すやきぬ也と
きてハかりうちきてきぬをとさらへし河海の給ひ也
京のうりさぬきてやハる所やさのまゐる御やさ
細
絹とも練くそめたる物也
わかよめたひともいつ御使にてきつかしされとわきさしのうち
我ともとも見わたりをたりやとてうへにと所してそくも
岷
右近も夕顔の御別るゝ十九年也とかなや早
まことのそとの心にと云り 細 右近か我もまつりしきと也
此女ていとうちて 案 三条かきる也
けの物をとにてそありしまくされあるまきてとも給

しらぬくさまへのう給ひて 岷 三条か詞也 我ちらの
夕顔の御かくれし女君也と云詞也 細 まつりおほえしと也
うちハわりしきみすやもいとおそろしくしたる
一 岷 先(ミツ)夕顔の御を問し 細 夕顔の事也
またよきのめくり見ん孰世をとひつるにつてきにや侍
年月かさへまてりとはつられまり 案 右近ともの也 身他
まつくさてしまつのとさり
まつ給ひしハわうすやわうきみにもうきうまり給ひなし
岷
玉鬘此めのとか我乃壊(コウヱツ)室のこと也 わか君とハ玉鬘也
事也 細 右近か詞也
あてきなし宮すくしいとて 案 乳母か君也
君乃待るハひつそは 岷 夕顔のことのとわかぬとも
細
夕顔はるまとハあきさへ行る也

これおもひまさり河ぞひにたちかへりなんと思ふ心とそいひぬ
みなおもひあまりて長月のころをもさりけるかな
こゝおもひまさは 箋 三条か后菩比羽也 細同
いとほしく思ひなれく忍びさゆる人にてさふらひぬへきこと
ありてこのかたにはおもとをもきこえかへりてさふらふ屏
風にふくものゝ見まつるをもおもひすてゝ河ひかりへきこえかれく
秘 たとえは年月をしく来るなとうつりまゐれは夕顔の
ゆくゑをも忘れ奉るましきをはしめといへり
細 夕顔よりはまさりて所むかへる人をは忘近なれとも也
あたらしは 細 まろはまたにて紀有るま御也
おほいへハまつり見へは思ひてもあらしこゝろをとりそへつゝ
めみてもおもしろきさまの所をもとむ大形をとかつれはける
くはへるせんたいにて風のたよりてもえきこえてつる人はなかなかとい
かくしつゝおもひたにあへの身はあひなきゆへにまかりけると
ところところきれとおもひて立ちかへりつゝ 秘 玉鬘は姫君の事也夕顔
是何と姫君と也姫君也
わか君のたちまさりて哀めてたりしまゝにすとようこちの御事し
まいりてまつりひまをてらん 夕顔の玉鬘をおもひ給ふ
をいへり 細 我君也夕顔の御事をいへり
まうさき給とおもひつゝれきゝ 箋 目をほしくとして見る
らん人あるにさもとえり 花 瞬(一タヽキ)也生(イキ)て目をとちくらん
人也とそ 細 瞬也 弄 秘同
むかしまちかひ見奉りしをとるまもいかくへんかたなく
まつりしとえとも 秘 夕顔のとくへのさきれともとえひ
そへんかるましきとや 細 たとうん也
ひそやかにしてもかひなしくさるかやうを給ふまさとはかまへ

にてこそみゆるべし　細　夕顔の上は此世ありましまさぬかし
とかや
二三人ありしもさうしきも　宗　むらさき式部の源氏物語をかきしも
いとむつかしくせきうつされ　宗　源氏も紫式部をかたどりて
日ごろ書給ひしといふ紀の海の浜ありしことゆゑにや思ひつめてかき
つくりをはありけりといふところあらそひしりぞきてたちかわる
玖　白菊ぬれもや御堂へ参りあれといふ紀氏也
まゐるとも見ゆやとおもひて　玖　尼君もたえずとひたまふ御堂
へといへるも同じきにちかつきたる人もたえずと見ゆ
て来る也
かくれたるものゝ人のあやしきおとなひかれて　宗　つゐにある其の
ありさまのひとつ客人したるなるべし
これこそもしことはりもものゝはかなきいひしらぬをはへりて也

まことに人もちかきにまうてくとおもひてうれしき思ひぬれた
とはひとつ志をはじめてめでたきに　細　法師も
中にいりてすきたるころにあらいそきて　細　源氏の浮舟や
卯月のひとへめくものゝ　玖　うすきぬや四月朔日衣かへし
一かさねや　細　古人の尺のすきぬをもて宗祇数寄のこゝろや
せめてこゝろさし人のもとへもしれひとへきたるといふひとへ衣
おもはしきとも見えねとのちにひとへはうらやましく見えたり
もうしさく　花のひとへは白雪のこときとつくるも雪のまれ
つきさきといふことうたのあるも也ひとへとこそはいへど今はこゝろ
拙きと云り桃花のことくしれひとへは奇特して哀なるを
きこえしとのひとへはかさねともあはれとうちさきたるに
称り給るたちひとへ乃かくに雪うるさうひとへの
色にのひとつきこそれはのひとへとあつきてさるまやうに

此さえにけるといへることやうもなくおもふへとハ也
え給ふ也とて寿閑之 細 一本に此ひとへめく物とありね
里ミぬとありてのしとうきたるもの也外月の時お
是をもる物あり
きこめ給へるかと此をえうをつと行るしくめてたくミ也
宗 ひとへりすきたるき歟也
ふるしうふ形しと見えまう 残 玉鬘ハ陸路とたくといふ子
ふあるへし
むかしあまれあるへきとて見えすにつきあけ置
残宗 たゝをハ辰巳(タツミヤ)あれハ御堂へまゐて参る事也 細同
細 ありさまあれるを也
此つゐとまて里つくひ字よつくや行くなる細とにその本
里給つるはと作をうしくへ出てそてのし家

残宗 玉鬘ハ此といへる給ひしにそやの時あつて御堂への本
里つき給ふ也初夜ある也 細同
たゝとうわけハ仏の大悲のこれちの給ふにしたり
細 玉鬘ハ日給ひし参り給へる也たゝをハ出て参り給ふ也
故は仏のちかくさふらふに局をとまへるや又の御ハ長谷寺ハ
霊験ある所にて局をかまへて人とやとひ也
との御師ありてまつくらへとかめや
残宗 たゝとう御師ハ宿坊
出仏前ちかし玉鬘の御師ハ長谷寺也仏前ちかし
とやろき紙まつ御かしぬやうそへるも也 弄 長谷寺宿坊
御手仏前を撿局今宿坊(ルヤよサ)へ也まつこそなくらぬとハ不宿坊
故也長谷寺東向もくし南り向ふるまきて
細 まうこうかくくぬとハし此玉鬘の御師ハ宿坊有り出る也
此義可然也

西のまへに屏風かけたるをみえたるにわたりしまゝのみえかしこひ
かれもやとこともなとさくめて　弄　玉鬘のつま戸ハ東北
かきこれハ戸をとうさきんも戸をとう局ハ紅としも
あり堂ハ東向也　南表か局ありその局から西の局ハ
とをしも也　細　玉鬘の局ハ東の方るに是も戸をとう局ハ紅よ
ちかしとあり堂ハ東向也　其戸の局よの面西局ハさと
こと也
もとにかくも也　いひあるをそこまさすかくある
紹　其後みり戸をとうたしめてみはとひきもて玉鬘と
我局へいまし　とや
かく河やしきかたれとたゝとの大殿まちまする　ひ給ふ　ハ
ろくかくれるをちめてもらうしこうる　ハ給ふしと
めこの給ふ中　うる人とハあやうの本めと　紹　たゝとかゆと

いゆしきうちと卑下してゐるも也　只との大殿とハ源氏の
御ことを也
よろしぬあまよ物とものゝ河まつしかりもるをかへしける也
ことなりて　弄　よろしぬ物をまも　あさハろく人詞
物かるらりせまりしかれとおとろくしきおこなひのあまされさ
そうしきにまうかさきて紅おもくなかうたるとハ人の中より
の人とゆて思ひてんとやわるとつるにかいくかくて乃なきれ
もしと為とふのと　弄　先ツ物とちうひもと聴聞せんとも
物とくの為のとくてをなまらんの御かんさし婦くめるに　本まへせたり
て　弄　源氏の御ことを也
さかとひあらしせまり給へるとやありてにくよう井中人給
ほくまゐりてたのと也り　弄　玉鬘の御ことをたまとうに給り行也
此御のうきいふをもまうてたりあるもいふかくいつきかひとある

うしやとてこの三条のかうや　抄 南国の国司此心を加へしも大和
寺や神領りなさるとやと色々のことくや
大やさみえことくさしとけし　抄 宗 大慈大悲観世音此のや
玉鬘のるちるとありけり祈りてさしとも　細 大悲者也観音之
はつ瀬寺　宗 あつハ我也　玉かつらのるや
大弐の北のかたもてなしけるもとあの少弐ありうちさまかへん
抄 筑紫此大弐を世りの少弐まかんとくに三条ハ忠つる加へし
三条らをもとハりかんりけつつく　抄 玉鬘のためしきさたる
抄ハ祈ひ事もかくあり
うゑりやハはかまつくんと云もハすりてとおそく祈んしけり
てとも　宗 立願をとるさんとや　賽 白氏文集
たく千いとゆかしくもいふかれとさて　宗 あらふ不足や海
くらしやせや

いとゆくこそ　宗 たくとの詞
み中将りうれ家　抄 ゆうるを同詞なるへし
中将殿ハ若のけ物ほしうたふさのおけりしまいし
抄 兵と八内大臣みておりしますを後三条り対して若の
官を中将殿とたくとのや
今ハ天の下をはしらうる大臣みていりさまるを
花 四海安危照掌内 百王理乱懸心中 白氏文集 百陳鏡
ようきはあつれいりしもとゆのめみてたれいさまるを
てかりしまさんものへて　抄 賞翫せしまうつれるとの
の詞也けまもしもとめハ内大臣殿のけるをちあさまさおもて
しまれけ中に此玉鬘のゆかさるそハ更所のめる玉里
てかりしまさんやともけまもしもれしへ助言や
細 と内大臣の仕むをめとてあり玉鬘るとさるや此更的

るとの妻りおり行へきるすへと
はるかう来る路へ大宰府を志つしまて　志す方ハ西か三条の細
ちまりある人のもまりしきん我のかたるを寄の路へとや
花
参ちらしありかるを揺を憐きりく故郷をも人に知らせてそもまれ
大宰府をさして志つしまて八志つしまち路へかてさうしもまふ
んと三条かえをとりしめつ細し
太宰のとたちかう人の清水寺観世音寺に来りし給ひしい
ことにひとはみつとのこゆきとぬやハおとまとる所　河　在二筑前国一御笠郡
満誓観世音寺建立也名別当也都府楼纔看瓦色観
音寺只聴鐘声ヲ　菅家詩　花　八幡ヲ対シテ松浦箱崎
とりひも台寺に対して志るの清水寺ハ観世音寺といへり
物語の清くなきいかよりしける紀りあそきる也　満誓か観
音ちるもと作りし時の歌

とふさうてあしかき山を西木きり来しに至りつ参河あそきる西来と
筑前国観世音寺見一万象如何一動清水の清水寺と観世
音寺同しのちに清水ハ在一所のの名也とそ
細
観世音ハ筑前国也于今東大寺西宮戒壇也
太宰寺ハ筑前西清水と云所にある観音寺とかう人なりし也
はるあしくつきとて方をたちしにてそのさるまさまてわからりう
てとかたを清くしし人そ三日ともかしとしんさし行つりたるをハ清し
をも思ハさりとえれとかく所清めて寺のとうにききえんとそこある
あらきりしたとこうひてなふ　はるあしくつきを
栄
ちるとりもそろしきるかなの路そと云ん也
清ゆくしあそきるとうきたる　栄　清焼文花李親王記玄延長
八年八月继経文還所岩寺ノ観音ヲ御病平愈ヲ将シ逍給
擬観音儀及女ニ鏡一面灯明十万灯ヲ之菜文御門臣菅亭

乃法性寺殿之時青蓮院法務大僧正也
ゆゑへ身とさやうの人をおそれしう思ひへなれは法の民のため
あて　抄　おもくるしきものなれとも此法師ハかやうの事はなれ
ぬ身の人なれハかへりて世をくるしむる也是ハ大かたの形文也
細　條文なれと大かたなくへ出て思也
宗　まことの哀憐の是といひつ法をあまねくいのりつへき也
ゆゑをくいのをさまり此時の事也　例年のきまりして玉葉の法
をもちひ折しハ例とハいへる也　細　玉葉菩薩の也
その人に此法まて来りふしてたるそのくらいをもたもちし給ふ
さしといひをきくをもおそれなり何ともいひし所にたゝひとへ
にいのりかくいのりけり給ひしあまりにそ給ひてといふ
抄　玉盤とてかれかけるとや此法をたとへいへる物ならしくし
よもなりのことなれとをもち此はいへるひとへにもたる瑠璃

また此くらゐにひとり又立形とも
いとさへうしるの秋一はおほけなりかれ世にまた家大臣
乃僧正ことなり　宗　其後の人くのさ俊をとりて
おほくろもらへものをくるを思ひしく此のはくゆまへつつる乎何か
しくまて此法しあるさ侯いとめてまくらかと　抄　法そ本懐弘宮よ
かへあるもて法雲のすかたをはるも宿坊ニ折りたりてあまたの
もの法師に似へし
おほけなく此所をひとへに此ひとへにてお俤くあるへとなへんかなてらしむ
まとく　抄　是ハ大かたの尾まつりくる網似へしかしとも畢
下ケの朔日や　細　大かた物語也
とのうへの法のすへていのへもとをかりもとらん年此方くらて
まつるを　抄　是上の事也　細同
又わひいて絵姫君此法さ侯いとまとふものはしめてたくおもしま

もうつきなまう給ふ度もたうしひなうあるに
姫君 孟 明石姫君也 細同
うち后の達給へる清まさりてまた給はしくのみし行ハ有さまく
事なん 孟 玉鬘此事也 細同
おとゝの君父院の御時よりもこゝろ此女御君をおもひたまふを
ハのこゝろさしくハあまりあつめ給へる御めのとも 宋 源氏此ま左
玉三か人のうへ給ふしことゝて尼君まて人にも網也父院の桐壺也
二の宮代の御母后と申しと 孟 冷泉院の御母藤壺此御事也
細同
此姫君の御かたちとゝのほりて人ハこと姫のかんやあらん
此物ゆへ也申給 孟 明石姫君乃事也
及ひまいらせ給ふは 宋 玉鬘と此上をとふらひ給ふ也
后の宮と申の給ふ 孟 藤壺中宮をも后とハ申

らぬ事也
姫君をかくやうに物し給ふもめつらしき御かたちあるにてありける
そゝろにかしこまり給 宋 明石姫君ハまつらう事ハあり
行末をくし聞おきて給とも行末もたのもしき物のしまさん
思ふ心とのみなりし八宋なりけるへし
うへの御かたち八宮の後見にもなひ給ふことなん見給ふ色
もてまいらせと物思ひしたまふを 宋 大臣にハ此上なきことゝ源
氏へ申たりしことゝもて心なり也へし
思ひやうにこそ行人ハ心さへうちふれて申し給ふへん
孟 紫上と源卑下（ヒゲ）しての給ふ也
我ハかくひ給へることそ君ハ物見ゆかれとなん云たまへれ
申給 孟 源氏まて立ちかくひ給はんこそ今あるましき
ことなれともえたまハれり自讃（ジサン）し給ふ詞也 細 奴也 紫上

なすとの給て源氏我身をうしなひたらんにの給也
見まほしきに命のかはさ侍るを又ならぬとそひゐてまし
うきよなと思ふ心侍らに　孫　物思ふ侍るとハ紫上明石姫君の事に
とゝめやすくとり尼君わり給也
いふかひなき給ふ物思はする人なりしなれともなく給へ
思ふとて　孫　紫上なとにも紫上をさへなくひとつにひとりしに
と玉鬘を見まほしまれとなしに物のましきたるもへもまうし
まさぬと思ふる詞也　細　玉鬘ハ紫とる給まうしなと也
いさゝかもされぬ事とやすくおもひなるらことへ侍るとくま
さらぬハ出かけへき事なかりしかうちなくて見えまれた
孫　わかるらん時しきんといふよしもなくまて色限なまて給る
とのやうに三十二相のこくの妙を眉間白毫なとのひかりを
あらしたく此玉鬘なるをとてそもくれゐる心へけるへく

花　むとうちなくてたくとり尼君かりしや
楞厳経云世尊頂放百宝無畏光明とも紫紅の光明の
眉間よりもて又足の下よりもなにも光の給ふ金色なり
なれぬるれハ光也光中に宝蓮上へいでゝ光ゆくなる光ち
給ふ也人の見るよりも光とふから宝上ハ限りあるたより
すらなを紫の大わた物紫花雨也
花　くへきもちもちとかけて　宋　むかしのか君と尼君也
うら侍らさ侍とほとくあやしきとの事かしまからぬへうしに
はるかしくわれを家の侍りならさとむかへてわかさし女の家に
むかへ侍りのまらぬ心のさまかさけれは　孫　尼君の詞也
はゝくれなくはむすこと云詞也又本そらとおもひ云侍
をかへて又はるかなくにをかしうひらくとかへて物をあかる
なり　細　給也

かゝりてあらぬ世の心ちなむ宗りまうてきし　弄　都をさ
故郷(フルサト)なれとも筑紫(ツクシ)にありつきてその後に還(カヘツテ)来る
くしき心也

ありおきところやうき様はこちひさしきを給へるすへの宮つかへ
しけ人そとのつゆゆきなりけるたゝるともあしくま
らんちかおもくなさてしかさきはすへきつ遊行へき
たと試さして尼君のかはおもしとかへる也
きよくなり弥陀ほとけの御ひかりもいとゝひとつうおほいて
たちかりおほし　宗　惟光のおりつき給やうに啓(レウセン)
行へとたえゆ尼君の中給也
きつしう　弄　惟光乃さゆ也
うしろむき給へり　細　惟光か
そやかてそうねまへねとも原もは法花ちかくめしつくる給

あさとのくわりなとはいつかなしきを給ひけれんと
花　みえとたえとり卑下(ヒケ)也いてやとあさとなとかとは給ふ
なへし　細　右近か詞
ささしおなる我にさへしみしとおきて　惟光は法とを
源へわらく中出しかるとも
我いかて為にこそうんとおもてさてさいてまうきさ也
あんの給はさる也いへと　宗　源氏は何としてかる事あし
給へん乃とり為出したゝいかくおかんとの給しと
給也
おもく此君はめてたくおかしまゆとさとちかやんことなき
めとこもありしまゆまる也　弄　尼君の詞也
まいさことのおやとおはいおほくにたてまつるを給へる
とかの人　宗　内大臣のこと也

ありし海なとかきなして世の人に流出くらかりしき
ことにあはれ也 抄 夕女は源氏要行ていまに云語
こぬ清んどくるに尼君にかゝるやうなるみてすゝきさ
まとたえよくしく語出るや
うれ清ららもたに見るをまんるとさくちすれうけくしさ
たりわうのをまてはいてたつせへあそえてとそとその
うきよりとの語あり 抄 夕顔のかくらにも鬱とかまつる
やさしれと常子この語うらしくるや
心柄さあり申るすハよろしう抄つまりしうまりほと
あて思ふ事もなきに出て来りし卯とに 抄 右とく我
ますと云りいまさのことよりくしく八百物の清くまうし
さに武うつくとえ我清りしとや 細 そのうさハ右と
をん好きあるうしとこ也

お武り奴語へまことハ清みあて云ことかきまつるをはだに
このり事り語ありしにほのことなまりしうとこなきそや
ことにさ 箋 お武よ奴て義法下向し時源氏へ出勝ちよ来
語し時お武との清みあてやうしとやされと必要のこ
とハ弱まさ給とや 花 お武るとの在をよ拵なむらんと
てさ可然云へ出つとまうひよ来るとまうるとやからそ
いなやうく 細 お武よ奴て下向とて源有り勝ちよ来語
急りしをとも見うやされと云時もえ弱せつくさるとし
ことや
さるやうと姫君とえら此ありしなれ此主条あそこくめまた
思語へらんとそ云ひし 抄 お武てるとも必要とハ又条
の宿りてもさなまんとこひしとや
はるれでしや井中人あてありしまさに海しよるるとうちが

まうひつ日ひとむかし物まうてしたまひしつくる
らふ人の行うさ晦さも　拾　つまくしやさしてハ御中人ありく
わかし事ちよりとたちより尾えりてるけるさも
見えくる所かとかちりまうへよりとゆくわれハふたもとの川といふ所を
みきたる　宗　初瀬のうきを中くらへせさ晦あるへし
二本此杉の立ところのしき手てハ古川の辺に君をみましや
拾宗　たゝ今のうたのこゝろを二本此杉ハ古川のへにあり義なハ初瀬
をあつめんとの心也ふる河の辺とハ初瀬川に付ていふる
やり初瀬の杉のたちとをあつめてハ玉鬘をもあひまうしき
とも也　細　此日初瀬にまうてゝ待しもハ待とちてあひへき
こと也
古　初瀬河古河の辺に二本ある杉年をへて又もあひ見む二本ある杉
ふるきこと也あとも

哥
初つ涙たりける初瀬川まし北すゑとまりけれはかへれ
ものを川とやくれとはしらねとも今日のあふ瀬に身さへなかれぬ
宗　玉鬘の事也初瀬のはやき瀬にあひてその事也
ながれの川をのまつしき流れにあひかへりてこそ
のそみにあひぬるなりけりといふ　哥　たちぬれとハ初瀬の心也
いふたちとも此そのゆきにちとたるなといふ
古　吉野川のやくへそのしあやむかしひとつことをとこ
吉野河岸清たく行たのかゆくとちかひそあて
此ちかくも同也我行へあひぬるハ瀬川にあらて
色ハたちとり行ひとく昔の事をこさをハ身をあひぬると
涙ハ袖をぬらしもとゝ也　細　玉鬘此哥也そのうち涙
ハ志く袖とをもあひぬるの涙ハ流しき瀬袖ぬると
河のうの也　拾　身さへなかるとは流しき瀬又母見わかれ

なとおもふへし
世のうちなるにくゝおほえたるさ夜のとめやもしやもさかりハいと
くるしくたゝさゆゑなりけり　孟　たえかたき也
雨中ひとりつくしうおほえたまふにおもひのこゝろなきまゝに
心そ袖のいてかくれいひしをて語らんと　孟　こゝろしの年月ある比
やうなきハおのかくれなくさむさへおもひしまさしたるを
うれとや　花　うちつくしき物語此世をあとにかへり納也と
よしきん也　細　女のかたあるまし物のことくしきハところ
きん也くちにうちかへある桂鈴をはかなくる也
おもしとう語りしくたまふ　孟　尾花のやうにそよくてあつきを
語りもうちそて可然とき夜なされえおとくやとまつしく
たふとも也　細　おもえおとくもあらかくた也
さく衣ハたゞいとかや人おほとるにつくやちくやそへたもや

さ語へりし是ハきこしくまてあまりちうつしきにうしめなと
終へり　孟　夕顔の事をたとへたる也　細　夕顔とよろハまさ
るさ海也凡此物語あまた出よつとすへ可おもて語り
むかしや
はかしと心まもてたひなかれ　細　雨後夜念ハ人のよく生きる
まろ添とく人おほくたゝ也
されハ人をさそひゆきたるに　孟　雨中ひとりをさそひ
さうとこゝろ里疏たる也　孟　若此外ハ雨中ひとる也
心語るくちなんるれハ家うにのかりて又のりもおくなひく
らし語　孟　若答の可然と見て能念とかなく思ふ人と又つ
まてる人ハ若雨中ひとるもまさあれたるうえ
うるれとや
枕風吉ようなるに吹のかりていとそくさむさありしまの

いとおこたりかたくものし給ふをかのひとはしきつくて
細 うきはしの坊の所也
人なくなりなんとおもふ給へるほとのひしにつるを
弄 人なくなりなんとも宮か見えとの御勢のよし也 細 又思ふく
にくきともさまて思ふ事なんともかなしにふれいくも
めくりあしき給とさまて給はりのましくの給ふ也
此人の物うとれはさてもちりゆかしの所ありけり
宗 ちからよわきも也
ちかくのみなれたてまつりけるとにも給めのかしか
しらせて給ふをきせた 弄 内大臣の所ゆゑとたつくは
さしてもなれもとも又の物めかし給へる御勢なのと
しくらひ給ふ也
かき下るもともえの事しく召し給ぬる 弄 御勢此畢

かくも
いつくそとかやとる所ともひかりて 宗 初瀬とて
御下向の時をもいふ 細 寺より出る時ても宿所をた
かひすよく御覧とて也
ともし又をひまとりけるにんとたとおもてくれまいひきから
そら家ハ六条院ちとれかたらなりとられハ 弄 さらひ守宿
なりと思ひしきもひらくハやとをくかく宿せんや
頃と事として心ひろくもとさへつき出まぬ心もちしもあり
弄宗 御勢ハ前守やうかりし九条の家へのおろたる大弐ハ六条院
ところうちもなれハ程とをそくかぬとハかりたる大弐の家を
まうとハ又五条なりしもあらりかとたり 細 六条と九条
と程とをき也
大弐ハ大宰の大弐 細 治部より還向の後也

こゝろすゝめ出ゆるはゝてまゐやせてつゝくおほしけるを
細 玉鬘比るよし也
清つひきつゝくるまをたてひとゝに心ろくとして
孟 六条殿へわたり車をひきつゝくる也 弄 二条院のめくりに
てありきなとをしひとゝにひろくとしてやむる
細 二条院様か媒しめくりて性と六条院ひろくかたる路
なることも也
さて来る車おほくまゐりて数あまたしてたちつゝくるをまた
ゆきこゝろちまるむのりてあやそれ〳〵おもまへりも来て
孟 まいりては退出也
とひすしたり 孟 ちかよる玉鬘のもとをたてまつるよし也
又のはるへきところを来まゐるにらうわか人のあつかりこさく
右と統めしいつきをおもくしたる性格也 弄 晩日のこれ〳〵

しはし人をはゝかりそれく来まいるその中にたてまつるを
まそめんばくらしきとも中宮上此めしいる也媒へし源氏
中宮上乃清涼殿へおひさゝりて見なさるを 細 中宮下さるを
めまゐる也
おもくを清涼しして 細 中宮上乃清くおもく源氏清絶した
なかめもしもおほり清涼しかるやはの詞なりしへ
こゝろをなきてとふる詞かて心みへし
なとうきや弁をひきしくしつるまれおもしきやまゐへの
黒けりたちとうえしくあるることそのの絶也
心ききよらへこ海くるやうともあるしけしきこるすなるを
らんなるとまへのむかしうさらふれことなるとの絶か
弄 たゝとは宮人媒しうひきうへかりゆくめやとの絶也こ海を
なとある年寄比立くつるやくことゝなり

河 若反〔ヲチカヘル〕 石

河 能露のきやもし我身おいぬとも又こまかへり見物ありなん

同 うちかの物語りし大将に成へくよし語へしとこと

同 若返は老年のゆりかへしてわかきに成やうなる心あるを云

細 河万葉若反をひとりとよみ右時流布仙覚か点ハ若反り点せりまた古点には若反へる也

まうでて七日ありしを侍ぬ道とおもひしきるやうはかくもなん

孟 さてかうの詞初瀬へまうでて帰まうでて七日計ま坂也 玉鬘此

三日ともにはしにさりはらからあなへり 細 長谷寺に二日参籠

さう角七日計也

山寺にし侍て 宗 初瀬へまうでて侍りしと云り

[illegible] 細 玉鬘也

あふ人をやとひ語りも出ん二とも又ある[illegible]也

[illegible]

[illegible]

とて[illegible]まいれハ[illegible]

孟 源氏の御詞也

[illegible] 孟 [illegible]

[illegible]て源氏[illegible]

[illegible] 細 [illegible]

[illegible]

[illegible] 細 [illegible]也

[illegible]

[illegible] 宗 [illegible]八源氏と[illegible]一[illegible]也

[illegible]也

[illegible]八女七八[illegible]

まさるも行へり 抄 業平ハさくと八廿八歳ハしも武蔵ハ四果て
て肥前まうる事お武任又其年也廿五年計る之て六条
御息所ハ廿二乃さし遊らき給ふる人し
をさし程へて見ん事まうハ又この御とあるを又ありひとつくも
行みけるとかくし給 抄 さとう御勘人を集る乃まうしにも宗
上乃句ひとつくも給ぬやとう付うし見てかく給ふと也
うれしをいとめてらく物としし也見ん事まうしらとふひとつしに
やあ給ここうれしきにさいとうひの身とあえたとうさして有へき
あさうれと見んあるをし侍 抄 宗 むうつくの御事也
人のきハをひつけるをまうえたとハ各別乃もとや見んあうを
らうく也 武蔵ともおさしく也ハされと程ありひとつ
あや業平ハまさうてて見ん事さうらく也
物語とのこる事とて 細 源氏よきさまるとあるとあるを給也

あさと給侍おし集りにめ候 抄 源氏の法師ともんとさとき
まうるのあるへし男女ともに巻生にさする也とう
まう見人をとうてしとてむつるめうちまうし人あるとちよき
かうし事むつひとつるを給うとの給へて 宋 源の詞とあるとと
さまそるるをとめるる也むつるとハ股立んあさに
あさるるとちかれむつひとさとさうつれ給詞也
人く無ひとつくも嬢さうやされハまつくひあしく給さん
をえむつくんうるさきよきちつれとひとつくも給とよつ
らうしさにちとひあへり 抄 めしつうの女房達うるし也
さうやも八詞をとりて源詞也御事もめしつうまとちうた
さんことちあしさちうれとの給うる内さえとん
人の詞也
う色にとやうしあるとちさちとおもいさるむつう給うむ

とや 孔 たゝ今ハ源氏のめくらし給ふを紫上のおほつかなう思給へ
らるゝや也 源氏乃給詞如へし 孔 紫上此詞也 源の心
しる色めかしきわさハよるの事の御心ならすとおもほしそのさ
らを源の御心すさましとの給也 細 源のことはなれ乃
給也紫上此名をなけとても月影給ふへきことや
なりましきはかなきことを見えあやしくなとたまはらすそ
まうひ給 孔宋 紫上の詞也源の御事よりもたまへれ給
ましきんとハ給のあとなしとなりましきんとハ見
給ふ也いつか四君とちか給ふこの給ふ紫上の方を
とにかく給也 細 紫上の詞也源乃御心一向ナきを
あるましきことハ思ひしなるや
いとあはれやうつきかへしきかたを思ひ給へりとハおもはや
きに思ひいそうしき御有さま事にもあしめ御心かなく

世中のとやかにおほさるゝまゝに思くたされさ給ふ事も
ことの給ひ 宋 たゝひとつ紫上のことをとや源乃こと人ま
さるまし也よくく見え給へし
おもしろく人の心をと給あまりに 孔宋 紫上ちかとの事給
御心を見給ふにあまりに思くまるをいとたゝつかれ給ふとや
此段源ノ地の詞也
うち中々人にとさへさうさうし給 宋 思くとうるゝ也
あるまし事にていかうかんやまたに給さけれへそ 細 源の御心にて
かれ事也
なまうちつけにとさやうさかしらひてあさてとるにいとゝおほし給へ
しを 孔 治部卿の事かれたらんやうなるよの給如へし
あれ見んとるもやさもあれくさまし給すしたりゆかしき心の御覧ある
つらきとなんと給へつるさうりしとの也 孔 源氏(スキヤウ)も彼若かりしひれ

見えらしきこの丸とこととも也
きに義故あることとられとしこころ〳〵くにうとの給へと
果 源乃詞也
あるとのまくみえ也えしあくうて阿やしき山里にあらん
丸とうんをみくかろまるくにハ申さぬ故へし
昔人とも申へきうかしてゐまれて 抄 玉鬘のめ乳母も給
てある也申也
その世乃物語ありて侍りてきえつくら給へりしをと
申しるりと 抄 夕良乃とも此時の物とりありしたる
ように源氏へ申也
よしなきう給をぬ法あくりやうくしやのし給へハ 果 岩上
扌源氏のうくし給申すにさも給さ侍也 細 源乃詞
岩上ハ其世乃ありなきう給まことしきやくらしくハ申さ

思ひまりしき心也
うへおなしつかし給へてさりしまているへくもあらぬものを
とうて法ならてしくてありうて給ハ 抄 岩上よりくし
給やうすれとやさくうなきあしこなうちめて給へさ
きとて法袖ありく耳とうされ給也
うちるとハ此乃昔の夕顔とをとうしやるとの給へとら
あるをほしもやうて物し給らんと打ま給しと
果 源乃とひ給詞也
まうよりうておむまのまうちて見えし給しうと申されて
抄 よもと夕顔汀をあはまし給さしやうひしにうとのあ
ろ夕顔よハ申さるまて見えし給とや申也 細 丸ととう詞也
あらしれとやうられたるるときやあ給也 果 源の詞さやうにあれ
喜特たするあとも也

紫上その給へる也　河　源乃紫上明石と有るうとなとまらひ給
へるを給ふそれ御ゆゑありまじきを中宮をとりさして
女御をとこのんたる也　花　紫上ハ源氏の御縁（せう）乃祖也　御聟
の紫上を我よ似るうと思給也　弄　紫上とその給也
細　紫上と宮紫上をとりへり　むすめこの紫上と八源氏縁と
いへるとぞ
いそぐ給まで宮とこそ中宮とハ　細　太上とう納
言るを御ゆかりと大臣に　案　太上とう御聟と思ひたり
とて太上とうかうらにおもへると源氏乃御心也
細　太て事てわやかりての給也
我よ似るかりしとうしろやすしとおぼしめさての給ふ
河　源氏乃我を子ならんと宮て親の子うりとし給ふるへし
宮の事よ似るしへの納よつきて花たる御ゆゑ紫上と云同

と源氏のとしくの給也や
かく中宮給ぐ後へあしきなるちつて中々えん後人こそまうりに
ましてハ弄ちうしんかうろ物の中の上すべきちおもひうまとハ
しつることをとらひ出つるにいとうまつしく中うりてあるつ
河　源の御聟のうすと中宮給ぐ後ハ太上と我よるへうひよを
て御聟と云事後へおもし給りんとのこととの給也め
しまねちせへうるへうひくの給也
とまて相似つうす給とうひうす給ことにちうん　河　案　御聟比
ちとやと中宮おぼしかすとても云御沙汰（ブサタ）し給との源氏乃
御心也まぐし給ての給ちすうへし
又相とく母たるおふうまて出えんつと何まうさまちさそう給め
るうほうしてつまえてめくらちましつつ宮えんうやくある
おとこそおしめ　河　案　内大臣母も御聟乃うすとの給しと也

ヱタチ手車あまさ何か中へ投ありてと初て立ましてと
行て八重くあかりもあらんと云へ八志てもたましと云也
我たとうくしきに物語を取りもして見しき
るとも心をらんし　宋　源へ清えもちして是いし　ことゝや
もこさ物ともの心清くさんぱうさそひあてつそうまてあさ
世あやとうるしひ給へ　地　六条御息所へまいりて好色（カウシヨク）二光
人々に心清くさせんとやくさそひと八心清くしの
さとりせんとや
うれしくやときつしくと云て　地　源氏の君もうしひの給と有を
うき事つしく云ふとの心や　細　名をとらんや
名く清心有らん　宋　とをうくも源乃清ん乃まつくや右
名とうかや
物とくに志てや着へんとも名もれうへつて人々御の哀し給へ

葬　地　内大臣有志てもたせんとも不思議也御と云へ余
くらきんこまきよりとてそ御身せしる人々見えたのんや
つらつしにも物し給しうちとに是ともかくもひさきに
もさもを給らんるるそそ　地　夕顔の君を給しうきまよむ
ゑうとしきたまもを給へと源氏をとうちらんまたを
うかや　細　夕顔のむなしく成給ひしは源氏也とたを
うきとくしめてちあやや
清うろいまを給たあ哀やあ　地　源氏故有りて夕顔乃哀しく
成給へたむくつるといつゝあも打さまを給て源氏
乃罪（ツミ）をとうろあ給へとや
いうろもつこちあ住うれと消く志とあつし深うつ給へうあ
さまにたうれうり常る契りやちらんとし往云ひとくる
宋
源の絹あまされあとまうれさ契り跡とを年は老てまるま

給へとハ夕顔のこと也
かくあつかひたるかやうのあたりに　細　人のありさま隣の中に
も夕顔上隣との人をもすれとも也
うれしのおほしたるを知ひとつもる人あるましきを
孔　六条院りやうにつきて給へくの中おも夕顔の時
給ふはくしあるはちすれと源氏の給也
命あらはそて　宗　との隣かさく六条ありて源氏の仕
へさし見えて給ふくひとを知隣きに夕顔ハいふひる
あくてよみくをあまえなるとを見く給よの心也
まうしあるさとを見えたるたくひ地隣かむかる中にいふ
うひあくみあ　細　花散里末摘花なとの類也
わと　そこたるともうくに見るもちわしくあんさひ事
給く時なれ　花　え々とそろう夕顔のうゑそ也

さて物語くいとこそ隣ハすみあちもへのれとて
孔むかう　夕顔をと六条院はよしく給とお隣しめきしなる
らんとの源氏の隣ん也
給せらるこなまう給　細　六条院よむしくへとらんとて先む
勢へ消息をはうりし給也　宗　むも勢へ源氏の消息
筆る也
かのすゑつむちるのいつひおかうしと知隣いつ出ハさか
りきつきてたひつてさらんくの乳母さうしろのさくいあ
まいりよのまゐしおほゆかう知隣さるてちう細つきまのかわ
やうにあるんかくうき給くもくにかく出ゆか
孔　前よく人の心あくさちきに似ひく侍見えさあかうるにこ
田給くさん文かさるとこむとそつうし給や親ろれ
つるのやうに実くしく出給也　細　夢の地雑して云

つまき橘のかけにうち経つるや
さしはも寄てさしむこ路江よおもふ見んとり枕をもちひさきにしと
孟 源の云三條江ハここをかれおもふ所やみえうりとりなをも
ともかう三條とりをうし云れんをお哲れ紹来をとも
さしもとともに過（カイデ）ふ寄絶さしてんとや又哲ハ名数はもち
あれハ云遣ハ名をしと見んうちのあり紀すちにたとへ
ていつる夜へし此云ハ花乃相より見よろうきて見る
あさや　細　それのとかくさしを経のひともをまことの
親のもちち云云ある事もしいさや力くろをハすちとい
ちんふあや水草や
抄槿 よ江路よわうとい事まる云うるへ名るきあ枕つきてへの
清きまゝ江よおもふる云う風のを思まゝねもゆかまへのしひくき　江
やちうん肯あかる清かとひ見へうしまうての経を海あると時の

清きうそくへくの世うあると云海くあり　あくとの持て来
なるやさうてく云退出（タイシュツ）也
えんにをうさんひ出て経へるあるへし　孟　然ふみを源氏清
族合とや　細　然ふみを我もきもめ寄出しあるよし
とや云うを経也
見えしも度あるとみをもまうる寄紀とのあしいつめていろあひ
しさ海あるとおとなる紙とえくを経へ達ハ為本ひろあと
とみえものしあめつくし云ゆうてあんこける　あ云よう
庶人（シヨジン）まひるまて装束（シヤウゾク）調をある人と清（ミ）更（ケ）度と云也と
細 大臣家あもわう衣服（イフク）と云てむるあをつきさるよ
清うしこハたくめしとちるをみてもまてとのおやれ清きをとい
あらハしをこ世つしうらめにてうさしぬへ乃清わさるとあそ
まつしうんとおもむきてとろしきたにおほしうれと

中 かくしこそとを武蔵や末の親の為おもひたゞあかくもとう
給ふらんりきこへぬ人の佐かるまじきとゝむかしに
なりけることをお事や
詞 東路(アヅマヂ)のみちのべにてあるひとも常がとも何ともいへぬとも思
はずぬ武蔵坊のなりやかくとはもとくしも引導同
あるべきかさとたゞとゞまりしがたくとも 源氏兼(まう)さくま
つとめ等閑(トウカン)なる科をとかくゆかや
とのつかさにかへらんの給ふをも ハル さてとはさあるましてとそ
んや源氏のためにまいらひ給ひてとのつゝ文おもくま
いもきこへ給ひけんとや
おもふの家をも思ひてさそ給ふんなん親子の契りはたゞ
てまたぬ身のおもり おもく 中 内大や
ただとり敦盛と侍るをもひそうたゞかへしつまむきまんとおもひ給

思ひそれに 中 こゝとなるにおもひ給ひけんとはそのなしへあそばし進
めしもつらしられどもでも弘誓の深くふかくひろ
てあひなりや ハル たゞとりの羽我教なしぬべき人あるまじ御の
悲しかるべきなれはましてて親子の契は天とりしとも
詞 源のいはらひ年佐なりやうといひきかもなりも
ほとをき神の定ちかき侍るさるとげるや ハル 浮なる引あかく
前世とともかんや
ましても難きもくそのうへにかりしもさいやとみなるにまかく
たのむまじき法をとゝせめてつゝをなるいとおもれくなかにひさ
らんものとそうしもおほひさとりのそれいとうちそ
しきとなるきてそうつとなる ハル たゞとりの進退(シンダイ)にあるまま
しても武蔵は弘誓の門あるもとめて父ともかひ給ひぬつら
つきらんとや 詞 まるう安穏(アンヲン)にたともまつあさき続

あはれ親子の中ハかきりある事とや先源氏よりまつもあま
つさへとや
猶あかぬ色なるや侍らむさまかれハいつもかく猶めてめかん
孫宗 玉鬘の君の方猶あかぬ方ともえ見る卑下のんや
いかれなるもちにうく猶をとゝめてしまいれてうたてあやしくも
なるとや 細 詞のはかなき辞様の方也うつくしき六趣侍也
紀貫之集 とて有しことゝや
世のことはのかなりてハまつられたちもてよろほうしるれとあ
さり御くちおしう思ひぬハ 宗 あさられくとそともらさき
へともにも可然と給との心也 細 此段ハ玉鬘方ハさうれたり宮
ま御もとかくうるを何事もとも紫上方なともとも由あるる
ハ方もかし御事ハさくれなる也
涼しん御ちる大事の御事へきよくも涼しくんまうるに

孫 玉鬘の君の御跡可然方て源氏の御心おちつきたる也
御かたちなとハうつくしう見ゆるを何とも見る程ハいかにも御
ことにもとかくのなり行つきたる 弄 紫上の御かたちいふかたなく
あり 細 同
きよらに人数にもあるへし 宗 きよらに同しやうなく
しきなき事をいへり 歌證 弄 あしらハたとへん也
中宮の御ありさまはあはれいかにもあるへくのかやまる
其と 宗 秋好中宮也 花 六条院の御へたてなきさまハ中
宮の御里井の時おりしもいかに猶やさ
わくさらしのなへらへらしやさしうなさんとおほしてもとくし
むかしのことれと 弄 中宮の御住処にまいりて人のまいりかゝらんとや中
宮の御さまハ猶殿へさるなる御まへと紫の宮御ひとへの御
ありしかとさしさきや

うしろのまち北東のたいへ　孟弄　花散里の住給へるや西臺

北東花ちる里のすまひよりも西よりなる方のたい

いや

弟子のおもくあるとおもとかへりてあやしと思ほしき　弄　文殿

弄　仙洞なるとは政大臣家なりけるとそ文かうとも納殿

書とも淀やそれをとかけりて勢をもまても給はん

との給はんや

あひたてまつりも無ひやくにんへの柳し給はくるかれたうちかへら

ひるもおもちらんと思ほしやさきけ　孟　花散里とんへ花人

見てまいりまうとハうるひ給ふんよ可給ふらんとや

細　花ちる里と思ひたてまつるよろしかるや

うちみるもいまそうれおもしむかしの御かたりせうしにて

給ある　孟　紫上あるも又数のことをもめてたうき給ふとや

細同

かく語んてはこなたよとおゝりあるにとうくるその給ふ　孟　紫上

かくし給ふて悟給ふや　細同

まうまうしや世に有人のうへとてやとかくいふなとハさうしい

てんの源はいて仁恩そてぬるそへ　弄　源の御夕数此世にハ

る人あてもあさき給ふとふあるを何からんの源源にいへく

代中こそ隔んなる死たまふしとや　細　源の御

人あそれとにこ世又中き□とていとまくふ思ほしいてたり

弄　紫上とふる玄木栄故すう夕数のうへを請給ふや

人のうへ見てもおもへく見へしに　孟　是ハ源氏の御後見し給ふ

人聞のことなれとも好色のことをさそひりて人のうへの

の給ひなとしなる御や　細　我身ちれうる人なれとも人のうへに

いひなすし給ふや

いとさる事も女といふ物のへ事とさとみんなしくハいつしにすまさ

もてなしきこえはつりしにたらんなきにしもと

弄宋 女のいかなるなまめかしきとも心得給ふとのやうなり

物のあはれをしらぬにかはりと見給ひつきてはしきをもおほしき所

なきをあかずおもひしをとかくひきなほし源氏をとの給

ひかる君さうやかれ人と見えしとや 細 さらぬ世中をと常

に源氏も中将もともに思ふも御心地しておはしまし給ひそのかみ

よひにたる人は大弐乳母也

とのゐしきこえしさまも何となくあはれなるを思へは中に 弄 心あるかなり

頼(タノ)してしはらくへたてつる夕顔の上るとのゝやむ中にも死

あはてさせ給ひて夕顔のことをきこえひとめく世の常なるを

あり 細 源氏のあはれさをきかしや

何されともおもふにもさらすらぬしもたえすなんとは

てらるゝ中に[illegible] 細 何も世の中に夕顔上のやうな

名は[illegible]しや

心のまゝに物をする人のうへに見ゆるとか見侍しましく人のうへさ

後と思ふよくにさんありける 花 女と心あるも夕顔のとせり

捕し給ひて御むね上は清[illegible]し[illegible]は何る人さうに上の詞り

見くたり源氏をさの給也 家は源氏の詞なるへし

細 小町とは御むね上也

かとくしうおほしさすらへたると思ふ[illegible]し[illegible]をも何

てさへたにおもひをもありし御あるとの給 宋 人のあるとき

またそこもくに何事にも夕顔はさやかに侍る人あるとみえく

はかなかりしをも何となくやさしにうるくあはれし人と給

給なり

さるともあはれなるに世立なく人給は何しましやの給

弄宋 此上の詞前の詞り源の心の町ま物する人のうへに

ハるをとこのかたはらにまし〳〵て御息所にあつかひ給ひけんよめ
給ふを紫上のめさましく思ひ給ふの御祠やほうらむもそ
まつりとかめしく身もとしあつかひ給ふしと御息所とめさましくほ
く㐂（キウキ）んし給ふの御祠ゆへし紫上の祠あり紫上も
御息所とをもしあちろくてひ給ひつや
摂政のおやしくをしめさき御しやんと思ひ給へり 孟案 御息所の
事也 孟 紫上の心也
姫君のゆくへ行つしをみるく行んともなくをらぬつらひかね
られも 孟 紫上の心也
又あとをもちをうしやおほしくへ内つかいすえあり月の事
あつけりも 孟 御息所姫君のゆくへきと紫上のの心も給ふめき
まつく御息所と源氏のあいかひ給ひことかりやもむか
多給ふとや 細 此姫君の母上なれも源の精くくと給ふ

こともたまふとも給ふとも
こうさをも給ひんともなくしもゆへてかまおんなうくき
ゆくへはるへんゆるとまとめさんはくしみなくぬへくちはゆくかぬ
へくくもたよりもちり御をさるなるとをとかりつけにつきそてよひ
はつめるとしみなうつかはせつしも 孟案 弘徽殿の六条御息所
つま給ふんなりやもあらくしまれや速やかしはうらんも
らうへ下つへやうの物なるとえくとり為なともなかに給ふなれは
さとるをすまらう給ふまましきよしや 細 早速なるもあり
ゝさゑや
御ありかのよひ出給ひしそそれりみなをとくうして多れハまさ
へものゝ京ハとのつうらさとをき下るなれく 孟 はくしぬく
たくうにつきてくれうしとをのひあつめしもつくしと
あまとのみなを給へさめしはやかへくもされをとくまてに

こゝろせぬやうにや　細　織りし浮舟しの行事也
いちめるとやられ物にとゝくねとめつる井てく　抄　ろゆうれ
ものゝくゝと尋るゝる紙墨とや　花　市女〈イチメ〉商人とよの詞
也とも見えしとある事
花に云　白浪とも守の日たち日あるまゝを市に市女出て日をあ記
と業今の世にも宮つかへ人なとをは物うる商人〈アキヒト〉なとある
たゝあさへ行ゝほとにとのゝしさくつきて件た
ちすることゝひ知くをや　こと
それ人の法をみるとは去てはせけの事也たとの里の文字
出なくさまし成りてくくらはとゝの人々てくとゝの人
あきしるに　抄　随分の人のよるとも物ちかれぬまさ宮仕
ひとくのまゝ物やとも物やあるりし座の息女なとにや
也や一説り玉鬘のとかとその法をもともとまくしくは志ら

せしとの説あり　然とも但師〈タジヒ〉説〈セツ〉は前の市女の事なる
者なりの息女を誰ともいはぬと同じ也　細　玉鬘の様〈ヤウ〉
性〈シヤウ〉をもあらはさぬ也
十月にぞわたり給　箋　十一月〈イ本〉可用之
細　一本十一月とあり　いつまても可然也
おとゞきんしの法にしたがひつきそなはり給　箋　源氏玉鬘
を花散里の養子〈ヤウシ〉にさせ給ふとやおほすへし
花　花散里は夏の町の東の対に住給也
夜とよひしん人の物らしきてかくれき山里よりくれなとの
御ことおほさるれ人の大かたしらぬとしてうるも人去まて仕
待りしとも見えもさんにそて心すんおほかたなりそて見えり
まうとおほくめくてうちすん中とつきとあるをうれしとて
抄　箋　是は源氏の君すまは花散里にうへるなり給也何の女の

あるしの我を頼て山里住しなりしかそのむかしをとめるなり
との給也年比思ひ給しことわりの給ひてさるかたにはなかる
まてるにあるとやかくかれとさるる花散里の方とる
しく敷をとらむや嫗(ヲウナ)をさてし出てなりん　細　年ころをすくるなるや玉

鬘廿二巻名

うつろひしはなりてをもなく嫌はなるを　栄　六条院へ玉鬘
をとりし給とたるや母をもなく嫌ひなるをとて玉鬘の
母なり

中将をと思ひつきをおもるにはしくやを宵おもふしことうし
ろさ給へ山ふかきてわひ思ひてられ心ありてひぬりつる母月
なりん　孤　夕霧をと花散里の養なりなり給ひはあしくそ
はしくとやをれしくに玉鬘をともしろさ給へとや夕
霧中将と家ありましめて見たまふると　細同之

なるへくおほとたふまてなくへ給へといひとこ宿やうたはせを給ふ
孤　可然事とふかれなめや
まんの後人の思ひしあるとおもひ定めしちりけるよ
孤　玉鬘のことをとおもしきうなしとや花散里乃詞　細同
姫君乃一所物し給ふなるへくしきたよりかなる姉とおもひつる
その給　栄　明石姫君たちなると思ふくさうくしきたよりなき
事也
うれ親なりし人をもんちなんあつらひ給ひまてよするなし清むるを
うしろやすく思ひやすれはなるとの給　孤　源の詞花散里の
はんとも夕霧所給へもあつかひ中なるくるやや也
つきくしをうしろむ人なるともなとおほつかってつまくを給ふ
をとまりなる人さそ給はなんとの給ふ　栄　花散里乃詞うしろ
を給へなとをとなくなれりしよくしきこえとく也

とのうちに人ハ清もとめてこともえしてなに人ハ又字つけていく
給へるなるらん　弄　花散里の女房達ハ源氏の清婚ともしもえて
てぬさるうらの人へとこひうくむつましくえふとや
細　源氏清くらの人へくわえや
むつましきなる猫あつるひとれとかひありは東三条にもちて
人のもてうくこともあるとたゝとあまけれは御中むつましきなり
宋　つる猫とハ其事のやむ事あつかしくぬはつるひめや
度ならんともあやなふくれともまたまとおほしき給へるその裁やうてかやく
のまふことらるもい給へり　源氏よりあやそれかかのはうそく集
しかとや
むつかしうるきんしなるといふみをきこへるもなきりしかと
宋　玉鬘れんや筋見えまて出なくしとや　細　玉鬘れはさく
かんやあてき大夫のあれとなるへし

年比のうねくしさにはしきも出ぶしさうを思ふなれはのかなる
私　おほとなかるに清九條の浦ころむかうそうに力ある
玉鬘のおさなかりしなきとの給へりさしもとらひかまへし
はりけるとハおさちなれりしさて源氏の清いるると
さゆとをりえし清りしとや
弄　いとくねそうしく清へこそおほゆるやかたるを給へるの
とをたくとうつくろえて　弄　源氏無双(ブサウ)の清さと玉鬘れおちたへるゆとう
うしをとうつくとや妻戸なるを放へし　源氏のちくるみと給へるの戸のまへ
いとくちにあるへきへくへとれたてそ出まことひ給てひきし
あるわさまにつけ井給く　宋　きそうくへてそ出へきへ今れとき
まこととの給也　昇初めたる方を侍へ出てしひや　細　源の
會釈(ヱシヤク)やての給也

夫ハ心ときをおもふらんあはれ 弄 夫の御かたのおもハまさ
う人なとにおほす也のさなる也まちとおほえるとの心也
おやのかたをゆるしきぬにてそこはけなとおほさぬなりて本
ちやうもとくしもとしやうの語 宗 此上親王なり語く見えとさ
ませての語詞也
ゑかきなくきこしけれはさりきて給ひたるやうたいなると定
めなきくこゆ 細 むつかしや
ともかくしもつはらかんやあまりむかしの語へし
宗 源氏の御詞也
おとうときてもとうらうもて 弄 夫とうきたてこゆるたる
ゐし 灯かるなや 細 焼といふ御ふしてうきる筆法寄
特なり
ねすみの人やともかくしらうしひ語也 弄 おとうと夫とこもくし

くらきたてにふとさるまと源氏の御つれなきかたとの語也
見とも會釋（ヱシヤク）也云心也
きはとお眼ゆる法まの三のをつくしおきなり 弄 むね苦しき
つらしをたるとも物對面なれハきぬもとと源氏の心語
こゝろ也
いさゝかもおとゝへりせぬ宮にてある法をかめとの語ひなき法
さしもおやめきて 弄 たくさゝなかくく定てなれやうにあつかひ
紛とや心さしかも偏心し語をぬ様也
年比清ゆく思ふをおもして心わりかきぬひきなくあはけき法をも
かうて見くるしたつきてもゆめれんちしぬ 細 源氏の詞也
色めしきのこともとなきへ思ひなるれり 宗 夕顔のこと
色ありて人なへし
えちなん世のことまちありなきて清めよしのことひ語なきと

にかはしうおほし出らるゝ此程のことゝ思て　箋 源氏のむ
せひく物もやさしきぬとて法めとのゝひ給ふ語也
親子乃中にはく年経ぬる事もしらるゝまゝのをとちきりつゝ
くるもあり帯る所　花　玉鬘は年をとこへ給ふなとや　せ
あまりまて親への中にはとくしさそくひは世の事を
あくしと寔(ジツ)子は檜り源氏乃の語ちか也
とは物うゐくしくまるひ語へさゝ法用とあもあくしと年
ころ法物くるまとるとも実のしかりしきにゝるとう思ほつかなく
ともちかゝうしら語かたに　某 おもきかくはすれ程とや
実らんこともちかくちうしられて　玉鬘の心也
何ことも法ちつとそめ侍りにける後　祇 玉鬘の祠也蛭子(ヒルコ)乃
父母に捨られしを玉鬘は我身のうへによそへて
いへるや玉鬘乃三歳ましまかはたゝしへきつゝ語へるを

さいはひもたゝる也
くそいろは不義と云なくん三年に成ぬ足たゝはしるか
細 三四歳此時よりもいなかにくりつゐやよく縁合あるを長也
三年に成ぬの事此詞あるへくの語也
あかるゝをもおるゝあすれくにちゝんと時の人に此中たく語教そ
某 何事もおきなりし程よ(フニヘツ)あるすれとのんとの語へり
むろしへ入りゐとよりおほしてよろひたるをあるはくゝちて
某 玉鬘此物の語教人乃教よく御ゆるとの源氏の心也
さうき語へりきるをとあそれともくちるくはこれうくすてん
ちへ　祇 源氏乃御祠也玉鬘の事へき語ともとは源氏
あかくてハ不義ともさりしとゝ也
いふりひちるくハあくゑ法りつゝへと思ほもて大きりある今さる
の語ちかきて　祇 んたへもいひありて方にへとおもぬ此也

只たくもの御法にあひたる如くし
まことに猶めでたく思しめされてまつりて御得しく
（朱）源氏法ありあるべし
うへ毎もくるまゆめに行たる山々の中に年へられしいんに
いと忙しきなしんとあらまつりしとうゐりてんたてまつりはま
てちんこゆるく源氏おもとひて入りましまして
（れ）式部の可然よし宗よりて源氏の御法也
無下の又なともの　（れ）源氏の法会寺堂のつるゝや
紫舞のうちこ御ましうと給へ見てりめしられ　（れ）六条院
ま御出て給まんを見るしや哉との源氏の法也
もと紀物とものいとうるりしうちてのことれ見たに見ても
名をも　（れ朱）姫らる下にあれと物まて給へくしときはま
よし給とも式部此やうある人の御身なる実に

えはくらしとや
くらもののひとさえひちえととり　（れ）もとれ物とものこゝと
はくる様なせんとや　第とは様也
いとうりもてなすてうけれ　（れ）式部もまてはやさんとのこゝも
御うちあるぬ人のもしな見てあつめんとの給へと
（れ朱）物とをとさやうなる人を見あつめて実へ出へさせう
まんとの源氏の御心あての給如くし
あやしみ人の物やうまれ人の心をもとまさんとてとさんなり
御物もとまをしうしたとの給　（朱）紫上の御也源氏の我も
もとめとの給うさやうに人りきさうさせんうすとさ
きにさてもの給ハおとちなきなくうしうし給ふとのん
りかり
まくとにえととそいきれんなくまうしへさやうにはまてなし

てならへかられ　栄　源氏の詞也右源氏の心とのやうなるら
むすめハ紫上をとしてたくとも髪をとるやうにはてある
て紫の君のやん花をとも　細　紫上をとものやうにたるくを
こさて人の心をとみるへき給をも我ら定めて後悔あるとも
いとむきんはしなるほとそくしめてこしひ給り
れ　源氏の紫上にめつらしき給へハ老をさうもとえきぬけさとも
んちならの我なく後悔のやうにされての給也むきん八
心ちすれ也又風流なるらすく曲との心すをもらる子すや
なすておかてありのいとけくなくもちする　栄　世源氏
の給へて紫上にもつくしく心給らく赤面し給ふ也
まつると記さるも給ふくしひなくひかり　細　源也
思ひやるかなハるれなくてむつかしくめすちやを君さつらん
給栄　源の哥思ひやる君と八源乃ほ君れとその給へり

夕顔乃上を思ひやる我ならぬ心むつかしの君給ふをとこ
とならもあれとくもまい家ハ親めくとも定きに家よ君
給より給ふよとのゝすをいつかるすちをも君るてんを
ハこりもちとハむつかしきんけいつかも地も定めの文
りんさしそあるらんとのへ如くへし　細　思ひやハ源の心なり
夕顔をとたも思ひやるかハおもなし家なる也いつゝあるを
ちかうえむつかしハまつとの親ありきつてのあひたるさ心さ
しのあるへきとも
夕とやうてひとつさうち給へえきにかなうおほしあちん人の心
細　給なめり也見給ふ　給　夕顔を一段と給ふとの紫上のんも
源の歌ハおほさあはれと紫の也給也
中将の君あたりうすへをさうてはいてたちまつちとうかうてむつ
ひとつかへとの給ふなれえ　栄　源氏の夕霧なりむつのまと

まの給也
こまかにかきて給へ人々もなとみしまてともなく御地にて
女とまいめしよろすへくもなん給ひなり　祇　此御勢此所にて夕霧
の心ならむ給とやうる物あるまじとめしよのをこりとおもふなく
しるし夕霧の心給也
清かるを此旨とあるとまうりつゝまつりて御かなりなとくい
宮まかくしくまる給へ也　祇　此御勢乃六条院へつかうひ給
女時をまつて御心よりいひなるを宮へくしくの給夕霧の
猶也夕霧なれ源氏の御かうしをもて中将のあひとを君
出にけりしの給さりんとも也
ゆうつくりつゝてんをあつる人をいひけんの　宋　うとにある女
房達八右京夕霧柏木殿御てまうしまさぬ物をとも
たりつゝうへとも也　細　夕霧八右京(ミミ)(ミツ)乃兄御にとも給也

女をとはくしやうしはすまひありしくとはさましつゝね
あつかひさらさしとやるくへあるくそにひさてうるや出つる
らひまりしきつあめとめうしうまさうくて　祇　飛鳥にして後をと
まひとさはうお武の鋏(夕霧)あれ随あとにひとされとされを
六条院はよく〱これたおきまいりめ中ひさらとも
細
其後女宮あて我心の限悲しく御勢をあるあるまし
ゐしと唯とか柏木を見れたる限をくるめ中をさらす
あて宮あるまじとも也
あやさくらくやいつひらう給給さ侮りもうるさもしめ給
ともやり給ゆるに　宋　清連(レンリ)枝摩(エキ)とと六条院へ出への末侮
をいつり花打や八源氏ちくらく八夕霧也
今そ三条も大武をあなつらしく云あり　祇　初瀬あて心
めしきやうに三条の心ひかしとに六条院の有様をみん

なりて大鼓の鼓をうちならして何かいつくへとも
あまり 細 花大和尚れいのくにあり路へとゆくにも答
寺岡く行しるや
きんのひきさし若きひ思ひつるもゆめしきさるうきとみまし
かんこのもとをれいてへとありつるに物り 詞 いきとゆしるを
気も絹も一ふりいきまのたしきをかひとありとくいきまたいはき
とくとりんかも 細 大丈夫監の事
若も物語しきのよ太子とも云ひつ子 宗 若殿の忠節(チウセツ)とも
警れさひまり路とや
物語をふたりはまともきこたりぬへしもてとまさ此まへし
ともとにくさめはうへきるすくもをきてさき路か若殿のまを
きともありぬやしくろ内ありひしつてきとみし心ちらり
みえりに兄様まく 詞宗 物語よそたる人をあつるひとよ油断(ユダン)

色あらんとて此警れ清ろうに家門ことも八幡付とも
若殿ともに家門(ケイシ)とあきさるくみも 細 花同く
ゆえてくめとみてをもたち出見るへきよいろろまへ物語くし
おほとのうちをわきゆつにゆそいほとあくし 細 此めあと
ハくのとそあめとも此度中へハ出へしうれを今家門より嫉
てふめまく出へして路白人へとまくさのふとも
人をとまさうへきとおとこなふ男とあわれ名を心いきめつか
ふくやこひくりおもく此兄の清んふとをそのこ歳のに育ろき
うわりしまいにるかいとくるしきあまとしれく連にたまつる
ひろまとへく此たるうくるよ 宗 若殿の孝心ありて若
云ふとたくへもと忠貞(チウテイ)めて告りつるを家への名をなすら
しにまさへく面目を得とうし男る奴へし
色んこともすれはつしに物語しをきてたうつるとともに申

助ける山ちると山口のうへにはなまつりをしてくみと女
心得 弄 玉鬘を紫上同前なり扱語也
てうしなるをたまう語 細 胡ならるゝるとみ中ひそて
とかはしめらるゝよりも志ゝて玉を語也
弄 玉鬘にもくちをしう語へも山様のやうにあなまつりてか
紳なとの志てもめやうのあしくてハ中に志てくめぐるゝと
さへくよく云をせらるゝやまして志てくめぬとも云とる也
心え也
津の國にあるとものことなされもくやてを清くして
弄 玉鬘へまうる大装束のかへてよみおくれ上をとらう語
とるをつまてまつうつとあこうちきのたくさ厳くある
城清く心あるたいと物いまくつらうまものととも那
弄ヨリ
織物と織度座よりまてさうる也

ひらくうしやうまてを物まへうとそれとうゝたにてし
給へとかなしきを度よはうちまつるとこゝにせさき語
花るを 孟 此道の際へつとこれハまさやとうれそおとるや
あるとの語のぬやうにほか紫上へ源氏の給也 細 紫上へ
上語也
これとうてきを語へり 弄 装束たちえをを語也
う原をもちてくさいとよくまて 孟 紫上ハ深物なるともそれた
なる上はあくまでしきせむ前をうそうにとく源氏の顔の語
んなるへし
世とりある給ををあひめかひとそあつきを給へいあるとくしや心まえ
心え語 細 紫上のやうの上へ今をひ給へるす
あらうしきらちとかすよと気あるある物とも清く心へし
ひとあつさゝるとき後くにそれ心ても語ひつ うちとの

孫 葵上をとうつ房やおやゆるとのゆくひと清見てうけとや
うちとのいとのもとしてあり　細　校引りて同時と能為
をと尊ハうろうやさやう此事ともとう承とかへり
ここ御心ハうしもさらとに心ハまゝさき給ひて知ともひける上
らうらうも心やくひとくこれをのまかせとうらもらうつる
細 源の字をとこめとらの也へし
うへも御見給らくいうまゝ知ともさも心のもちらめも見とめまのたまお
めるをとこさ給ひん人の源のさちに知をひよらそへつもれ給へる也
孫 葵上葵未来にまほ源御見しして　源氏よりの給ハうまゝ知もらうま
さらめともうけまゝハへしの心もちに御合(二ノ宮)もくらんとてこ給へる也
まうゆへハめのあのまぬ人也ゆくしこそ物也めしの給下知の源氏
方にも給へくれ初(キサキ)をもとゝる給ひんとめに心とさき知は見
ごさての給ゆへし

小さきなる物の清まに心にあハひさくしくをさるしやとの給へる
人くの清らうちをとたるとまうらんにとめゆり知くの給也
知らくうちちりひさくらうまゝるそく人の比ちうちすとしらくんの
源んあめり那　孫　葵上の御心ころをとまうらんさめに世界の給な
のさと推量(スイリヤウ)し給くはまゝすくくへの心もちうをとまらしまう
んの源んとさと葵上の御のめきとて人のうちのちうやとらしも
うらんの源んあめりるとも
清くうつまゝとう知御をとの給へも　孫　清くうつまゝとうちん葵上
のは葵未来めもようらんと葵上とりゆへりて我もりやち
るをもさして葵上ハうまゝとこさ給へるさるとも
それも境のまく心くてうさ清もともにちもらひきくあきらに
孫 けんハ陰(カミ)をと見くて也のうれとハ我ひとなるひあくさきある
また源氏りとくいの給へとの給也　葬　葵上ろうさ堂

そこはとかう身あらくハや此こ云説ありあ用ハ一部にかゝる事な
人のうらみのしらしきと情ミそて見くるやうなるもいてう
とかうもうるへきとこそやこうつくしかりけんもの也所説　細　我身にも
うらみなとあてみるもうとかくハ気のくるへきや是ともと
深くもそうしに給へとも花の宿卿哭行るも
あらくハわいとめんうきたりこえひそめ此徒にうちきつまゝや
うたとれいとかくれあらとハうの表まてり　私案　紅梅ハこきめの
うすやうひそめめやうハ面(オモテ)ハ蘇芳(スハウ)裏(ウラ)ハ花田とやとやうなと
とハ西己こ中りとそのれハめはかくり紅梅のこれうなにやまと
なるくあやゝの徒まてりてハ上の法襲束あり下ふうなる人し
末摘花とめとりけると紅梅のすんうきたるけうなるき
とやうたハうきとのこゝゑあつ夕ゐへし　私ハまやうなとこ也
かくく出来たるとこれもくく云也

桜の細長につやゝかなるかいねりとりそへて　姫君の御
まうけ有　私案　面(オモテ)白く裏(ウラ)あかきと桜の細長そるすかいねり
花やかに裏ハゑひ染との給へりハ桜とハ葡萄染の
あやのうちきるやはやりかなるとかきこつやのうちき
あかきはハめえの唐衣ハ奈也　私細そあかき女のきるを
一部ニ此さるれし上臈(ラウ)のうへりしきる物也下にうきねのさ
ぬハあるへきやうく桜ことハ此すて白きやうハ桜のとを
こそ知るり
あさとうかさとみの衣ゑとうち物をことなさうめ衣されとこ
ひやうかうくめりのとこえハ桜かさうして夜の御うらに
海賊(カイソク)ハ大波り海松(ミル)貝(カイ)なとくとわりたるうへやあさえあさ
ぬれそめかつひやうあうくめとハうてうあつさそこれかうしぬ
ゐやこきうハ桜のとハ桜かちうて様く深うあさき衣へ

し夏の御かたハ花散里へまゐるや　細 大波よみたるや
くまなくあつき比に山吹の頃をかけ　弄 山吹ハ西を指
紫の上ハ紅梅なるをいふかたしく花やかにてあるよしなと見ゆ
とりわきこれハ兵部卿宮へかけたるや　弄 こゝろをあらはすかくいひけるとハ
こなたのなりや　細 うちとけぬや
このほしれなといひけるをまた語りつと　細 兵部卿宮也
うへそひぬやうにて物思しおほしけるも我ほとゝのたまはれやうに
何事にもさとめてはしたなくおもしろくきこえ給ふのは
しらぬよそなるかありてもそれにそへて見ゆるをことにあはれにしき
給へるまと　弄 紫上の心ぬやうにて御消息して蛍宮のことにあひ
あて人の所存ともを給へとやその心を内大臣ハしらぬや
かれらひとめてハ内まてなきかたきこえもなくこえむと也
此兵部卿宮の蛍宮ともこれやうにハなかまてなとなとしめくらふし

あさからぬ御よすかやうに給てかはしたに絵合またかやうにまかせたる
給てかなり給ふや内大臣の指称と兵部卿宮のよに絵合せられし蛍宮まて
のたまひあひたるよく給へれハ給て八西の兵部の君のみなる内大臣の息
女かやとくちおもへいてとはしめてあそとなりたる也
うちの物もく　細 さてきて文の内大臣のよく給ゐるよし
思ほえて
夜ともなり給へるにきこゆるかたもと　弄 源氏の紫上の御中をとさと
アと給てそのことをとかり給ふ源氏の心ものおもしろくかなと也
花あて源氏をかたり給へるを紫上をそれそれとも心の給ふをかた
おもしろくなるや
ゆそこのかたちなるへハ人をしらむちぬへきものなり
弄 人からとはところなくとことにとかくハ腹かはちはらはんなと也
ものもあひハ無上（ムジヤウ）なるやうにかとかきまる上前あるや人のうち

は隣なる物也よまれとも又おしきうちもありとる事を
思ひしも紛らかんと紛りれあるをも有りとのんを知る
こひおる物とハのへり紫上ハうちハかきる事なれぬのとまり
その紛りハなるや末摘乃くらへらるねハ紫上ハ又梅花を紫
らまし也てまた紛らかりしてかまろぬ装束を紅梅也
紫上の人乃情とと見ん紹らんもと末つらしハさんとての紹
羽也
物のたとへハかきらとなり　細　此葵分への人ハ紅梅り見て紫の上紫上
乃色紹と思ひしくてかくの紹也
人のくちハそくまてるも又ここひおる物とて
此句ハつり奇特たる也き事也
うのもとつ花乃ほまへに柳のとう物のようもあらくくさを
これを見るもいとあさましれハ人是に思ひしも末紹

花
柳ハ面白ろく裏(ウラ)青し表ハ柳花と云也さきとにあく
ぬと紅梅とも思しきまま紅をハ装束のめてたきとに末
らも紫へ似あらましこととの浮んあるへしこれ末
摘へまつる也
梅乃折りえくさてふ高とひちくひとしあくる花もろきこうち
きにこるこうはやくられるかきぬくあらし花はうるに　花果白き
う紀めんの折り物よきあちかきを紅梅するや花さとい
かくここ紫也と此世よりしてみてかまるハ花の色の
やこうき紫乃うちかるハかえるとのありてうれくしき也それ
を白きにハかさねさえきてうくこゆへさ也河よ紅梅の
うちこきねとかへるあやまるまつるよし花めその紹へりこれそ
ゆんゆへ紅梅あるへし　細　こききうとハ紫也河説あやまま
まうると

思やりもなくうきとう人をめさましと見給ふつきもとのあま
君より　細 紫上ハめさましく思しとくしきことの心なる人し
あなとみひの行あといとんでもあるとゞミつき給て心ほそう
なりけるくちおしかれ心そゆるしとなるとへ給ふ
孤 あなとみひき尼のこゝるとこゝやはなしそめ花さぬとも尼君の
云とみ可給ひしつとて源氏の心まてに思さし給ふとて
思て給給也又ゆるしとへ紅梅のにほすさ也出家乃人も
うきものさぬよ用例有へし心は並なるゆるしいとの
せしまでの必しも並へつちかる人のしもと也花すゝハの紅人
つたくゆるしとハ病むとも給へゝきや手まこハ淮とも云る
ゆへ也梅るしともとのへうのこれなぐくるともや　細 ゆるし
色ぐちおしのゆるしや紫の云ゆるし又あるくハるし浅(セニ)
黄経(クワウケイ)紗(コウ)非(アラス)制限(セイゲンカギリニ)以下て給ひし也　細 ゆるし色也淡し

うきゝわや上古ハ尼色も用也行業有ことなくいる花

視可紙

行るし白き給へき満せらくことしめくらし給へり
孤 宋 心の中の満くらく人をえ白にめさるへきよし満文と
めくらし来せちるや　細 皆えた白の満まうや
あにふけつハあるゝんの満心ありてもとも満ヘうとをたくある
もく満役乃ろくふくなるにまるつむ記んうの低りありすれ
えともくしうしもちあれ　孤 とのくさ給へるさ見るく似合た
つえうのさ去ろ給ちん多めも似氣付也　細 紫上の御よのを
て見給へるたちめ理也とも
えんあるへきと　孤 さしもちあれて末摘ハおうしものも一廉(カド)
あるへきさともあるたとのんたなる人し
うちつくし紳し侍人のて行る人ハさたハさくる人給の法

琢 末摘ハあやめもしらぬ心地してちとも色ごのみなどたゞ人ゝ
をよくしらぬものくさへりともなくうちゝき給ふとや
山かつのうちさるれ袖口のさうもなくて紙ふうかにかみてうち
うけ給へり湯かそあやもいとうつりしきにこゝちのくにうとのまゝ
しき年へあつきさうさなそゑこころに 琢 宋 よりおもや袖口のさま
たるやうハかうひさるなど云うさぬのこまぬをもち紀とうつゝや
と云う一つめの心や源氏よりの此河まより給や 細 彼深也
そや給へかとも中くにとして 宋 末摘より河ゐてゐる女云や
裳ものと給ハ中ゝく所ハあるとの述懐(ジユツクワイ)し給ゑ也 柳乃
絹のとゞき紀たまや 細 文の詞
まてこれハうしろ見て後ゝの人へしかうてん袖をぬらして
末摘乃宮乃や心之ゆ也此裳ものとさ給へて中ゝく源氏
をかゝき給へハ袖をと潤ひてぬらしうへにむとの心也

琢 末摘源のまとゝとある紙信給あるへし
河ゑのまちゝちあとくにあかよるをにかりけるとつく頃そこ給
てとこゝあもちうちかまさ給けむそう人あにうるのまんと見へをこ
や給へり河彼まうつまきたる袖をとりまとのもしくかさりけるく
と物見しあ 花 枕草子にいあかうるをて三四人ほしほと
ひくさなるも見んとするもありうとと案あ六奥(オク)の宮やあ
あきあるといふをも奥あさん心也奥とりふてあるあとや也
さえ色にうしろさとりふ末摘の子孫乃若やうあかるなと云ゆ心
うしと奥(オク)あめし南附なとをしにさ給て心ぐうあや 細 奥宮也
上古や條りにかゝるおうしさや
河久しさわしくれハをへりまよりてぬ 琢 宋 源氏乃河ふ氣と河彼
うきぬ立さ海や末摘の孫とも此河綿もとある紙のあかしく
も給らく河久しさあしさや 細 此孫條を此奥あるれそ源

氏の此気色をあはれ給ふ事ハ清げにもなく云出るも
はづかしくなどのたまへるをさしもめでたしと思ひあなどらるやうにはとりなさうな
るめりしうかさりけるをおもしろきものとおぼし給へるとぞ　抄　末摘乃孫を
女房共もほゝ笑みあへるべし
あしらひなとてまつろひぬべし　抄　末摘の孫などいふ
ら拙くも申しあへるをと源氏乃思召けりと也又孫なるべきも
の給へり
あつかひさしはたしきまでなり　栄　君の時も末摘ハちぢとも云ぬ
と乃紐と云るあつかしきまでしきの時も源氏のはづかし
を批判(ヒハン)してのへり又君の時末摘を嘲(ロウ)して源氏のいふ給へ
るからやはめるやさしくひとらるゝ給へる詞とも也
細　源氏乃まねぶ也
うるはしの者よりころもをぬれてめでたくもとそゆかれ給ふ

抄栄　末摘のやうなる古代(コタイ)なる者よりことへいつもおもしろくなす
あらそひはへるとよりそ給ひぬるやと源氏おぼしく云給也
唐衣(カラキヌ)をぬきかへるといふやうの詞をうかれぬべしとぞ也まだ
是つむ事をめでたくして衣をあつかひ乃はしくられハたれもとハよくそ
うらもちつゝのこともよめり唯と此身の上もしらし衣袖のぬる
るとよみ給へるも不堪好詞(ショヒーコノミ)なりやとの給へる者よりまんへハ
可哀なることも也　細　唐衣と云事多く読給也けりそれに事
よむるなとハへり
まろもそのつくろし　抄　是ハ末摘乃ことをそ思ひ給ヘハ源氏
乃此身もとも是は者のことよりそも卑下しての給詞也
細　源もを手やまりとも也
おもしろくしちなまつられてとめきたることのそへ侍るを給へハ
抄　古風(コフウ)乃一すぢなるなるとありまた
ぬきそへハ孫なることとそへあまた

ちられてちらとくいろく雨のふる紀友のよのうへ秘らへれくとくや
人の中なることをおもふしおもふ人なとのうへさかゆるうへ力んの
中ありてハまとふひきれ非まし殺力くとし　そうし　秘果人乃中なる
ことく是人のあのうるやたくるのるをとめ給へりおもふし　おもふ人
るとのうへさとあるやうれおもふ人乃諸歌あるとありてかなさと
うましく或时此歌読人のまととなるとい三文字とやくと
もたれそうするる此好読する不可從とや　河ニテもちまする
せる秘ハうくあしきたくまくわしき物毎そ見付ける
後嵯峨中あくまとなるとあれねしとあり定家卿やか母ハ
三文字のそうしやうく古人云三まそうしきをありそうなうり
をとしやうハやまとめ字やとと出来くやまとあ字二字のまのそてを
紀惠ミも三文字とす讀心假令不堪乃歌の讀方座會
ると物やを旅でんとて毎夜ありまとなの三文字とをくをく

案ずるも蓬生宮の唐衣毎夜出来ることし河に
號くと出せる中にまとなる乃三文字と出る可然気侍り
下句にあるく人のとく云ふ文字とつくを待ましも三文字とい
ふとまとなる我に如くしうく　細　我人云合の時も堅ま
となしてなるとよまても亦とも三文字まとなるの三文字也
若乃をさうれおりしきいとこゝあはあるく人の思ひ了なましとや
とも御にいちときてことのそれはくきさうとうとある哥ち
すへありるを下くひ記に　秘蔵　をさうのわしきいとこゝを
ハ始ミこの如くるありて男女もにくるようの秘歌此とも也鈴書
歌合とて婚河流の時のまのをくまつし其號也いをを
とハおしくるも也なくる人とと云文字をと切く好読る可然
とや中まとめ歌とハ歌の此申三句とを云へし或ハ申句一にとをもに
事紀のやあくる人とハ歌の此歌毎ほも読られとも當時ハ

さのミにこれはきかまほしきやうにいへりさやうにはあらぬ文字をとり出て詞
かはりたるやうにいひなすことは世のつねのならひ 源義
なるへし 細 ある人とはさうたちかゝるすちの事をいへる
人と云事を必頌するや中ゝめ源とハ中の文字よまり
河 ある人のかきたるを添てもあはれ我身なりも字
そなへてをりぬ 強(アナガチ)不可限以一首二惣(?)書(ニヨ)歌ありある
人と云詞を好(コノミ)読(ヨム)事也
よろつのはかなき哥枕よくあつめたるを見てそのうち
かたとさしとともなるに 孟案 哥枕とハ名所の哥をあつめ
たるをいふ 能因法師(ノウインホツシ)か五代集の哥枕のことくなる哥枕
とい 細 名所の哥をあつめたる草子也毎家はしゝるる
ありやなしやをたつぬるや
よみつきたるすちそはようもさしてたるへきされ 孟 読侍を

てこそよまれけるとてもちやうにはやはらかならさるへきこれは
さのミにめつらしきことはなけれは物さとしや 花は万の事を
哥枕よく見ならひ案内をしりたるやうにて其中に此詞をえらひて
哥よむ人のことをする也 此白紙まてある也 一万葉古き
源氏をとをよくみかゝる人さとや 案 末摘乃父宮ならんや
細 おもちかなきのうきさまにほとれあり
細同
からやうにほそうしとこそ 孟 紙屋(カミヤ)紙(カミ)也云ハ昔小野にてよくさき紙
屋川にてすきたる紙也うんやうとといへり
見よとてなくもとかし 孟 末摘ハ源氏ゆ出有し時この
草子に倣んせよとて宰相のを源氏に給し
とや 細 源へ奉らせ給しや
わかれとハなかりしとところせかりやまひさるへき不知ほらかし

も　河宗　古風なる事を好く云又哥病にさしつかへて云

集にも物あるへし　河　有文家ニ髄脳(スイナウ)又濱成式(ハマナリノシキ)なとあり第二七

病　喜撰式(キセンシキ)なとに有四病　孫姫式(ソンキシキ)髄脳(スイナウ)有八病是なとあり

弄　一都(セン)盧主(ロシユ)石見女(イハミノニヨ)髄脳(スイナウ)といふもの和哥抄あり　新撰(シンセン)

髄脳ハ公任(キンタウ)ノ撰(セン)也　和　哥読へきやうをいふ文也

もとうたもよくしれるかこのいとしたわくうこそもつれたるも見

えきりしうえも　河宗　源氏乃卑下(ヒゲ)の詞なり　もとよりされたり

とハの給へうこきもいくも見ゆるにしけるとハ哥なれはおもひ

あるやうをかくハ一向(カウ)青ともちうけすへきやうもちかれ

とのかや　花　哥をよむ人しめたる病をもちんとせと

まえし文字(モジ)にまきなりや上句(ジヤウク)の哥ハ病をもちんとせなと

ともさのうへし病ハちすとれものや

むつしうてなしてき　宗　末摘ハ彼髄脳を源氏なして給也

よくあるハまき給へる人のくちつきなてハめすれあこそおほ

生とてわりしく物ほいて添たきそ　河　末摘ハ文官乃女(ムスメ)

有　随(シタガヒ)給へるにより古風なる事をこの給ふつきと源

氏のよく詠給ひし　列(ヒキ)とあるよしや

いとわしきや　河　末摘のことを思ひて紫上にわすれ給へるにや

そのいひなしもさまハ笑ひとかけるへし

今人ハいとよのめやうにてもさるにくきてめて姫

君のさを見なとなりりあるものを　宗　紫上乃詞也ち

と種憐(キヤウミ)のくんなての給ひや姫君とハ明石の姫君なるを

し　細　紫上の宮りの給也

うくに物の中なりしとむしこれこそなひくなれと

宗　紫上乃詞にありしかとも申てなとちひさき也

あり紫上の詞也

こぬ人をこんとにしもをとをとうまくれとの給　孜　さゆへ人の
髄脳ちとしの歌を見し人もあまた讀んうと残きことの書上
の詞也
姫君の御かくまんすいとまうるあるらん　孜　御あの姫君此ため
あれきや此古風の歌ハ男女をあるまし　此をの源氏の
詞なり
まへて女ハ宮ゑてこれめることまさきてむさめるきさ海たまう
らぬことも侍るもいとつきなからんハうちわすれしを
孜　宋　源氏の詞也　女ハ宮かゑもこのむるゆとてさのことに御
まるはおしきことしやたゝ大なる細ことも此可笑と
ありさへひさくもも行るゆえとも思う給をあいしさきのことと
とやるきと行るゆゑもつきなからんハうちわすれしらん
といふる也

たくひのまちちと今くよろしく後まてさつあゐをさてあるらう
うあらんのこちらんめやまそうるへうあちあやとの給らく
孜　是ハ女乃足退をいふうらあもしくをとちるまもちてあるう
うあらんあゆまとれ物とやもよくくゝとつきて見るへし
細　くゝとふさそんとでさし腹あしさきやうちあるへし
清らうこと是物ほしきも是のハ　孜　末摘へ源氏よりも清文ま
いる是清返るゆあれせそしろへしあそちさんとハ源
氏ハお返しめしをもようぬとの詞也　細　かく物語よして
末摘乃返ありし給へさるゆともこ給りきるも
うゐしゆうてんとあめるたうれよりもをしうへし　行ハ治らんを
ひろくしうらんとそく此うし字ち給ふ　宋　書上此詞なり
うゐしゆうてん袖をとぬらして更末摘の方よ背しるゆを
の給也ゑきれ御返ゆあらんハひろくぶしきことも也

花 末摘の方にかへしやりてんとあるに源氏の御返事なく
ハいかゞとおもひておはしけるに情なかるべしと
思ひかへさせ給ひし給を情様給ぬ源氏の御心なれ
ばさすがにもと云給ふ情なるを云給ふ也　弄 御文の返事
に云なれあるかれもとかくへし返事有べき常也とあり
かへしやりてんと有けるにぞへてや　細 文の返しに衣
はかなきことをしかくへし返事あるべき常なるをやうへし
やりてん袖をぬらしてやあるにさしかへし給はさらん
と云る詞面白
情もなきぬ物こころあてうき給　細 如く思ふ上の給ありつきてや
いとこころ中をもとたるゝ也　抄 何と云給くともてるしかしぬとの
詞也末摘の方に不堪(フカン)なれハ源氏めでた云給へるりや
かへさんといひてたゞつきてとふるしきのよるれ衣と云ひしそ[illegible]

抄 源のはも方末摘乃方にかへしやりてんとのこ給を注て
かへさんといひてたゞつきてとハいひつりさやうに情の給ありつき
てそあるそのよるれ衣をと云ひやるやき身のくるしかる故に
花 末摘のかへしやりてんハ源氏の給ひりたる柳乃さぬを中
くあれたるかへし参らせんとよみ給へるそのかへしと云詞
をうしあそもしもあるぬることとるまるしてあり
いとせめて恋しき時ハむばたまの夜の衣をかへしてぞぬる
とあれハ末摘の[illegible]衣をかへしのこなるをはかなく云給
てせめて思ふにかくれて衣をかへさんと云の
給ふそあはしめ我方ハ情なき(十茅)ひとつ[illegible]ハまた
理なくておりと女の程をつまて思ひつゝ給へるや
とこそ思ふにさもあらぬくりとはけてうらへこ細
やさし 細 かへしやりてんとあるをこれ[illegible]夜の衣かりとも

なしてよめる詩縁也源乃親方此句まてとあらすはこと
ゆゑなりや
いとわりやなきそ侍める　私案　是ハ源氏よりも此文を嫁へし
故に帝(カ)の詞(コトバ)(カ)も可(レ)勘(カンガウ)之